
最強とていとくと魔法使い

パトラッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強とていとくと魔法使い

【Nコード】

N1256P

【作者名】

パトラッシュ

【あらすじ】

学園都市最強二人は激しい戦闘の後、異次元に飛ばされる

学園都市最強、一方通行、

学園都市第二位、垣根帝督通称、ていとくん

彼らは行き着いた先で可憐な魔法使い達に遭遇する

ちなみにこの二人は仲はかなり良くなっています、

それに加えて半ばキャラ崩壊気味ですのでよろしくお願いします

とある魔術の禁書目録とリリカルSTのクロスオーバー作品

未熟者ですがどうぞお付き合い下さい

最強とていといくと魔法使い

学園都市最強の第一位、暗部グループ、通称一方通行

暗部スクールのリーダー、学園都市第二位の力をもつ垣根帝督、通称、未元物質

二人は互いに争い合っていたのだが、垣根帝督と一方通行は突如現れた黒い球体に包まれて異世界に飛ばされる

そして最強の彼らを待ち受けていたのは……………、

なんと！！可憐な魔法使い達だった

最強の彼らを待ち受けるものは……、

とある魔術の禁書目録とリリカルSTのクロスオーバー作品です

未熟者ですがどうぞお付き合い下さい

プロローグ

学園都市の中心部、

凄まじい爆音と共に辺りに停めてある自動車やトラックが吹き飛んでゆく

学園都市最強の第一位、一方通行

彼は激しい戦闘の最中、青筋を立てながら口を開き怒鳴り声を上げる

5

「垣根エ！！大人しくくたばりやがれエ！！」

「やーなこったモヤシ！！テメエこそとつと諦めて家に帰れバ―カ！！」

六枚の白い羽を生やし、この学園都市最強の一方通行から逃げ回っている少年、

学園都市、第二位垣根帝督こと通称ていとくんだ

「黙れエ!!!俺が買い込んで置いたア缶コーヒー勝手に全部飲み干しやがって!!!ぜってエブチ殺ス!!!!!!」

「ウツセーカフェイン中毒者!!!テメエこそコーヒーまみれになって死ね!!!」

垣根は六枚の羽を変幻自在に操り一方通行の攻撃を巧みに防ぐ

凄まじい攻防戦、二人の戦闘のせいか街の中は半ば半壊状態だ

「クソがキリがねエ!!!」

「はん!!!テメエの常識は俺には通用しねえ!!!」

垣根は勝ち誇った様に怒り狂っている一方通行に向かって言う

すると、何やら争っていた二人の真下に光の円の様な物が突如現れる

「ンだァ?コレ?」

「あり？」

攻撃をピタリと止めて固まる二人、

二人の足元に現れた光の円はどんどんと広がる

次の瞬間、二人は光の円に包まれ引き込まれてゆく

「嘘オ!!！」

そして、二人は光の円に包まれて学園都市から消えてしまった

接触

——ドサドサ

「グエ……」

「……痛ってー!!」

とある森林の中、

状況が分からないまま飛ばされた二人は重なりあうようにその場に倒れていた

詳しく説明するなら下敷きになっているのは一方通行、

その上に垣根がのしかかっているという状況だ。

「どこだ？ 此処？」

垣根は辺りを見渡しながら独り言を呟く、

辺りにあるのは木や林、人影は見当たらない

「…オイ、メルヘン野郎オ…、あと数秒でそこをどかねェと冷蔵庫にするぞオ？」

「あ、悪イ、てゆーか居たの？カフェイン中毒者」

垣根は下敷きになっている一方通行に詫びれない態度でゆっくりと腰を上げる

「デメエ…、やっぱりイー回ブチ殺しとくかア」

相変わらずの垣根の態度に腹が立ち、青筋を立ててチョーカーに手をかける為に首元に手をやる一方通行

……がしかし、

「……ン？」

「どうしたー？」

どうした事か一方通行の首元あるはずのチョーカーが見当たらない

「どういう事だ……」

一方通行は哑然とする。

それもそうだろう、本来、脳にダメージを負っている彼はミサカネ
ットワークによる、チョーカーでの補助を受けてしか演算が出来ず
能力どころか話すこと、歩くことすらろくに出来ない筈なのだ。

しかし、一方通行は今、チョーカー無しに言語が普通に話す事が出
来る上に普通に両足で立っていた。

「オイ垣根エ…」

「あん？」

声を掛ける一方通行の言葉に振り返る垣根。

——バキッ

「ウギヤアアアア!!」

——ドカーン

試しに不意に垣根を殴って見るが能力もどうやら普通に使えるようだ。

ちなみに殴られた垣根はぶっ飛んでしまい、近くにある大木に体を打ちつけられてしまった

「ハハハ……カカカカカカカ!! コイツはア最高じゃねエかア……」

一方通行は思わず笑みを浮かべながら言う

一方、殴り飛ばされ自身の上に崩れ落ちてきた木々を払い除けて下から這い出る垣根

「デメエ!!! いきなり殴りやがってシバくぞコラアア!!」

殴り飛ばされた垣根は背中と頬を押さえ高笑いをする一方通行に向かって怒鳴る様に言う

「おゝ良いぜ久しぶりの全快だア殺し合う持ってこいてなア」

手をパキパキと鳴らしながら頬を押さえている垣根に向かう一方通行

「普段なら上等だ!!とブチ殺してやりたい所だが……、冷静に考えて今はそれどころじゃねえ大人の俺の寛大な心で許してやる感謝しろ」

自分と戦う気満々な一方通行に向かい話す垣根

今状況が掴めない中、争う事はとりあえず避ける

「お前のどこが寛大だア?ただのMじゃねエのかア?」

(ああ…コイツ、ぶっ飛ばしてえ)

垣根は怒りを込めた拳を強く握りしめ、冷静な顔つきに変わり再び辺りを確認するように見渡し始める

しばらくして見渡し終えた垣根はゆっくりと口を開く

「んゝ……、やっぱり学園都市……って訳じゃ無さそうだな」

「ああ…、そうみてエだなア」

二人は互いに現在の場所が違う場所であることを確認した

「どうやらどっかに飛ばされたみてえだな俺達……」

「アレだなア……、俺達街を半壊しちゃったからよ……、アレイスターが怒って俺達を飛ばしたかもしれないねエなア……」

落胆し互いに肩を落とす垣根と一方通行の二人。

「……そういやさあ俺、この間、嫌がらせにアイツのガラス張りの液体の中にファンタグループ入れたんだよねー今にしてみれば、多分アレがまずかったかかったと思う」

「馬鹿だなアお前、まア、そう言う俺も昨日、あん中にコーヒーぶち込んでだけだよ」

自慢気に話し合う二人のくだらない会話……

どちらも到底自慢にはならないが

「デメエもかよ!! しかも、よりによってコーヒーか!!」

垣根は思い出した様に呟く一方通行に思わずツツコミを入れる

「…ねえ? ちょっと…、君たち?」

「「ん…」」

二人は声がしたほうへ同時に返事をする

そして、目線の先には宙に浮いている金髪に綺麗な赤い目をした少女が二人の前に立っていた

「ええと、ごめんなさいね急に声を掛けて」

「いや別に構わねえが、誰だいアンタ？」

金髪の少女に向かい垣根は冷静な口調で話かける

「私は機動六課のフェイト・テストロッサといいます君達が持っているロストギアを大人しくこちらへ渡して貰えないかな？」

機動六課？ ロストギア？

訳のわからないワードの数々に首を傾げる垣根と一方通行の二人、

「なんだそりゃ……」

「……オイオイ……、メルヘンなのはアコイツだけにしてくれよオ
頭がア痛くなるぜエ……」

フェイトの言葉に隣にいた垣根を横目にため息を吐き呟く一方通行

「んだとセロリ！」

フェイトは再び言い争いを始める二人に困ったような表情を浮かべ

ながら話します

「あのさ…、貴方達はもしかして、次元漂流者なのかな？」

二人は互いの胸ぐらに手を掛けて訊ねるフェイトを見つめる

「「次元漂流者？」」

遭遇

「「次元漂流者？」」

二人は話すフェイトに向かい驚いた様子で声を上げる

「そう、異次元で異世界から飛ばされて来た人を私達そう呼んでるの」

フェイトは首を傾げている二人に笑顔を浮かべながら話す

「とりあえず二人共、
今すぐにロストギアは渡さなくてもいいから、とりあえず此処は大
人しく私と同行してくれないかな？」

「……だってよ」

「ンだよ、俺に振んなァ」

一方通行は話を振ってくる垣根に不機嫌そうに言う

「……フェイト？だったか…？どうせ俺等、行く宛無えから別に構わねえよ」

垣根は両手を挙げて目を瞑り了承し、隣にいた一方通行も黙って頷いた。

「それじゃ……近くに仲間のヘリコプターを呼んであるから……ええと……、」

「あー垣根帝督だ、隣のコイツはアクセロリータ」

垣根は言葉に詰まる少女に微笑みながら答える

しかし、これがまずかった

「垣根クウウウウン!!」

その一言が引き金になり、完全に一方通行の逆鱗に触れ

ドカーン!と爆音と共に一方通行の辺りにある地面が吹き飛んでゆく

フェイトは目の前の突然の出来事に啞然してしまった

(…………ええ!!)

すると、しばらくして一方通行が飛ばした地面の瓦礫で舞い上がった土煙からゆっくりと人影がはっきりしていく

「……つぶねえな！セロリ！」

そこには白い六枚の天使のような翼を生やした垣根がいた

「……あ、いや、

悪いねえフェイトちゃん、驚かせて」

垣根は生やした羽をフアサフアサと開き、笑みを浮かべ、手を合わせて謝罪の言葉を述べる

「……、貴方達一体……」

フェイトは相変わらず驚いた様子で能天気な謝る垣根に訊ねる

「……俺等はいわゆる超能力者、

そして、最強の……、

……レベル5だ」

フェイトはしばらく啞然とした後、復唱するようにゆっくりと口を開く

「レベル5……?」

「そういうこと」

垣根は生やした羽を巧みに操り一方通行の攻撃を防ぎながら啞然とするフェイトに説明する

「オイ一方通行、

いい加減止めろ、

待て待て、そんなデカイ岩どっから持ってきた」

垣根はひとまず怒り狂う一方通行を抑える

「あははははー……」

もはやフェイトはこの現状に失笑するしか無かった

『フェイトちゃん聞こえる！？』

と二人の喧嘩を眺めていたフェイトの耳に突然の通信が入る

「え!…、はやて?」

『そや、今そちらからとんでもない数のエネルギー反応があつたんやが無事か?』

そのはやての通信を聞いたフェイトは苦笑いを浮かべ通信に答える

「うん……、問題ないと思う…、多分……」

「死ねや一方通行!!!!!!」

「あめエよ三下ア!!!!!!」

と通信をしているフェイトを他所に一方通行と垣根の喧嘩はますますヒートアップする

「……………、バルディッシュ」

流石に我慢の限界に達したのか二人の喧嘩を眺めていたフェイトは武器を取り出して上空で争う二人に構える

「いい加減にしないで!!!!!!」

「「グオ!!!!!!」」

そして、凄まじい爆音と共に二人の争いに終止符が打たれた

――その後、

物凄く長い説教をされた二人は、フェイトに連れられ機動六課に無理矢理連れて来られた

その道中で相変わらず仲が悪いのか良いのか分からない能力者二人は凄まじい喧嘩を繰り広げ六課に辿り着くまでに二人は力尽きてしまった。

ちなみにフェイトとしては二人が大人しくなってくれた分、楽になったこと思わず安堵していたという。

そして、今現在、フェイトは二人を連れて建物の中を案内している

という状況だ

「そんなもって、ここが、機動六課ってところか」

連れられて来た垣根は辺りを確認するように歩きながらフェイトに訊ねる

「うん、そうだよ、皆いい人達ばかりだから安心して良いよ」

「別にイ悪い人でも大歓迎だけどなア俺達は」

一方通行はケラケラと笑い声を上げて話すフェイトに向かって言う

「……あー、コイツはあんまり気にしないでいいからフェイトちゃん、

カフェイン中毒で、ちつとばかり頭がおかしいんだ」

——バキッ

垣根がそう言うのと一方通行の右拳が右頬を捉える

「……、痛ってえ！！！ テメエ！！！ 冗談じゃねえか！！！」

「嘘つけ、テメエは常に本気だろうが」

垣根と一方通行は再び互いに言い争いを始める

（この人達、顔立ちは互いにカッコイイのに、なんでこんなに仲が悪いんだろ……）

フェイトはため息をついてがつくりと項垂れた

「あれ？フェイトちゃん帰ってたの？」

フェイトは声の先に目線をやると、サイドに髪を束ねている可愛い女性がこちらへと向かって来ていたのだった

「おや？」

「あん？」

言い争いをしていた二人は口論を止めて少女の方を向く

「なのは〜!!」

「うわ！一体どうしたの？」

フェイトは思わずやって来たなのはに抱きつき泣き始めた

「もう嫌〜」

「…い、一体何があったのかな？」

なのはと呼ばれている女性は苦笑いを浮かべて抱きついてくるフェイトに向かって言う

とりあえず落ち着いたフェイトは涙目になりながらこれまでの経緯を簡潔に話した

「あー…、それはなんかいろいろと御免ね……、

それで、君達が話に聞いた異次元漂流者かな？」

「ああ……、多分そうと思う」

「ケッ…、随分アバウトだなアお前……」

なのはの問いに頷き答える垣根に向かい一方通行は微笑を浮かべ言う

「にやはははー…、

とりあえず二人とも案内するから私とフェイトちゃんについてきて
ね」

「あいよ」

「了オ解」

言葉のまま案内する二人へとついていくのだった

自己紹介に常識は通用しねえ!! (前書き)

案外更新するのは大変だ……、

てな訳で今回はなのは達と互いに自己紹介をする話です

……では

自己紹介に常識は通用しねえ!!

フェイトとなのはに連れられた垣根と一方通行はしばらく歩いた後にある部屋の扉の前に立たされる

「それじゃ着いたよ二人とも

はやて入るね」

フェイトがそう言うと言った扉の向こうからどうぞと言う返事が聞えると共に目の前の扉が開く

「機動六課にイラッシャイお二人さん!!」

なのはとフェイトに連れられて来た最強能力者二人は扉を開けると椅子に座っている少女が二人の視界に入ってきた

「話は聞いとるで超能力者の二人、

私は機動六課の隊長をやらせてもらってる八神はやてです

よろしゅうな」

はやてはにんまりと笑みを浮かべ二人に言うが一方通行は何やら疑いの眼差しをはやてに向けていた

「……、クセエな」

「「……え？」」

すると、隣にいた垣根も一方通行に賛同するように頷く

「何を言ってるのかな？」

「そうだよ垣根君に一方通行君」

「あの、君付け止めて…なんか痒い……、」

疑う自分達に対して訪ねてくるフェイト達に向かい言う

「まあ、それは置いといて、私達が怪しいとはどういう事や？」

「ンなもん聞く必要あるかア？」

大体なア此処にィ来るときから妙だったんだよ、テメェらは、話の内容が上手すぎンだよ俺等を無償で保護するなんてなア」

疑問を抱くはやて達に向かい一方通行は続けて話し出す

「何を企んでやる？」

一方通行の目付きが鋭くなり赤い眼光がはやてを差すように睨み付ける

「なんや見抜かれとったんか」

その視線を感じたはやては諦めた様に二人に向かい口を開く

「率直に言うとな達の機動六課に二人とも民間協力者として協力してくれて話や」

はやては睨んでくる一方通行に向かい微笑みながら言う

「へえー…、いいんじゃないかねえか一方通行？

タダ飯喰わして貰えんなら安いもんだろ」

垣根は能天気隣に鋭い目付きをしている一方通行に向かい笑いながら言う

「……、まアなア…」

(いざとなりや、何時でも潰せるからなこんなところ)

一方通行は垣根の返答に対して適当に答える

「それじゃ交渉成立やな」

はやては協力する二人に向かい笑みを浮かべながら嬉しそうに言う

「そういや自己紹介がまだだったな、

俺は学園都市第二位、通称未元物質の垣根帝督……んでもってこのモヤシが」

「第一位、一方通行だ」

こうして二人は機動六課に入る事になった

とりあえずはやてに自己紹介を終えた垣根は何やら六課の三人に向かい話し出す

「ちなみにテメェらに一つだけ忠告しとく……」

「「「？」」」」

「この世界の常識は俺達には通用しねえ!!」

「「「はい？」」」」

三人は垣根の言葉に全員首を傾げてるのだった

「まあ、そう言う訳だから、

なんか会話してる内に演算し終わっただけ」

「なんだア？ テメエもか」

垣根の言葉に一方通行が驚いた様に言う

「「「……演算？」」」

三人は互いに声を揃えて会話をしている二人に訪ねる

「ああ、そーいや話して無かったな…」

垣根は自分達のいた世界についてはやて達に向かい大まかな事を述べた

「——てな訳だ」

「……なあ、

ソレは最早、人の領域を越えとるんやないか？」

話を聞いたはやては苦笑いを浮かべて目の前にいる二人を見比べながら言う

「……、だから言ってんだろ、テメエらの常識の範囲内を越えてンだよ俺達は」

垣根は壁に寄りかかりながら話を聞いて啞然としている三人にめんどそうに答える

「それでエよオ？」

話を随分前に戻すんだけどよオ

テメエらが探してたロストギアってこれかア？」

一方通行はそう言うと言っている三人に向かい赤い結晶を手の平に取り出し見せる

「「「え？」」」

「なんでテメエが持ってんの？」

「いや、気付いたらポケットの中にはあった」

一方通行はそう言う手渡しで正面にいるはやてに渡す

「なんか、色々訳がわからんけどええんか？」

「ンなもんいらねェよ

それなら垣根がいくらでも生産出来んだろ？」

「ん？まあな……」

垣根は話をする一方通行に対して素っ気なく答える

「「「……………」」」

三人は二人の会話に驚きの余り言葉が出ない

（（なんか知らないけどレリックよりこの人達をロストギアに認定した方が良さそうな気がする……、））

何気なく言葉を交わす二人を見ながら苦笑いを浮かべていた

「ま、まあ…、そんな話は後です」として」

フェイトがそう言うとはやての方を向き互いに頷く

「ほんなら二人とも、そろそろ私達の他の仲間も紹介するな？」

はやてがそう言うとおの方にあつた扉が開きゾロゾロと部屋へと入って来る

「ようやくですか、待ちくたびれましたぞ主はやて、

これが噂の……、」

「そや、

この二人が次元漂流者の垣根帝督と一方通行や」

はやてはどうだと言わんばかりに部屋に入って来た者達全員に二人を紹介する

「ほな、手っ取り早く自己紹介右からどうぞ」

「私の名前はシグナム」

「私はヴィータだ、

よろしくなテメェら」

「デバイス開発担当のシャーリーです、

よろしくね」

三人は一方通行達に向かいとりあえず自己紹介を済ます

「それじゃ主はやて、自己紹介もおわったことなので、

この二人とさっそくだが模擬戦を……」

「」「悪いことはいわないからとりあえずやめときなさい」「」「」

戦闘狂のシグナムの模擬戦にその場にいた機動六課全員が声を揃えて反対する

「何故だ！なぜ皆反対をする！？」

「それはねえ……、」

「うん…、私もこの非常識な二人とは戦いたくないもん」

「そう言う事や…、悪いことは言わんから
止めときシグナム……、」

「主はやてまで…、」

シグナムの模擬戦に対して一方通行と垣根の話を聞いていた三人は言い聞かせる様にシグナムに言う

「オイ、だけどよ、

なんか話を聞いてた二人は殺る気満々みたいだぜ」

ヴィータが一方通行と垣根帝督の方を向くと二人とも首の骨や拳を鳴らして既に戦闘体制に入っていた

「オイ、セロリ邪魔すんなよ、

アイツは俺が冷蔵庫に変えてやるんだからよ」

「デメエこそ引っ込んでろ……、

今、せっかく俺の体が全快だからよ暴れとかねエと気が済まねエんだよオ俺はア」

二人は悪魔の様な笑みを浮かべ模擬戦をしたがるシグナムの方を見る

（（ヤバイ……、シグナム確実に殺られる……、）（））

「私はどちらでも構わん……!!」

（（マジか!!）（））

シグナムのまさかの返答に目を丸くする三人

そしてその返答に垣根帝督と一方通行は笑みを浮かる

こうして二人はシグナムとの模擬戦をする事となってしまうた

自己紹介に常識は通用しねえ!! (後書き)

ということで次回はていとくんと一方さんが活躍します。

それではこれにて…

未元物質VS魔法騎士VS最強（前書き）

今回は色々とめっちゃめっちゃにしてしまいました。

——ではシグナムとの模擬戦始まります

未元物質VS魔法騎士VS最強

——結局……、

一方通行と垣根は一時間近い凄まじい長い討論の末

「デメエは引っ込んでろカス!!」

「……ンだとオクソ冷蔵庫、俺がア殺るっつてンだからデメエこそ
ひっこめコラア」

と仲が悪いのか良いのか分からない二人は互いに譲らず半ば喧嘩気
味となってしまう

はやての仲介により垣根対一方通行対シグナム戦をする事になった、
要するにサバイバル戦である

——そして、所変わって

——訓練場内

「さあて？シグナムつつたか？」

「ああ、そうだ…、」

垣根の問いに対して既に戦闘体制のシグナムはバキバキと手の骨を慣らし相変わらず余裕な表情を見せる垣根の問いに素っ気なく答える

「せいぜいスクラップにならねえように頑張りなよ」

「ふん余計なお世話だ……、」

「まあ正直どうでもいいけどよオ……、」

テメェらの内、とりあえず、死にたい奴から俺に掛かってきなア……」

そして、一方通行も首の骨を鳴らしてもう既にその場はある意味戦場と化していた

『それじゃ始めるでー……、』

はやての放送の声が訓練場にいる三人に届き、三人とも頷く

『……、開始や!!』

はやての声と共にシグナムは早速、目の前にいる垣根に向かい攻撃を仕掛ける

「ハアアアアアアアア!」

声を上げて前方にいる垣根に向かい一直線に走り出す

本当なら自分と戦いたがっていると喜ぶところだろうが、

今の垣根は違った

「なんだかなあ……、」

右斜め前方に見える一方通行を見て垣根は思わず項垂れる

攻撃の対象となっっている垣根は相変わらず冷静に身構えていた

「一直線に俺って事は俺の方があのモヤシより簡単に倒せるって思われてんのか」

垣根はハァーとため息をついて首を捻り骨を鳴らすと向かってくるシグナムをジッと見据える

剣を構えたシグナムと垣根との距離が丁度間合いに入った次の瞬間

だった……、

「——絶望しろコラ」

その瞬間、凄まじい爆音と共に垣根の背中から白い六枚の羽が現れて斬りかかって来たシグナムを弾き飛ばす

「……、何!」

シグナムは突如現れた垣根の白い六枚の羽根に驚きの声を上げる

「だから言っただろうが、俺と対峙した時から、ここはもうテメエの知る世界じゃねえんだよ」

垣根はそう言うと言現さした六枚の羽で上空へと舞う

そして、その模擬戦を見ていたはやてやなのは達は目を丸くして驚いていた

「……、綺麗……」

「ほんとだ……、まるで天使みたい……」

垣根は羽を巧みに操り、武器を拾うシグナムを見下す様に話し出す

「とりあえずテメエから手っ取り早く片付けるわ……」

すると垣根の羽に光が集まり出し、段々と光を両翼に溜め込む

「——くたばりな」

眩しい光と共に垣根の翼から光線のような物が発射され、ズドーン
！！とシグナムが立っていた範囲が爆音で包まれる

「……、あん？」

「ッ………、

良くもってくれた、
レヴァンティン………」

爆風が消えると剣を構えているシグナムが現れる、

「……これは正直、驚いた……」

あの殺人光線の威力は調節しといたから死ぬことはねえとは思ったが…

まさか、あの俺の攻撃を耐えきるとは恐れいったぜ」

垣根は笑みを浮かべながら剣を構えているシグナムに向かって言う

「……嘗めるなよ」

シグナムは宙に浮いている垣根を睨み付ける

その一部始終を見ていた外にいるのは達は驚きのあまり顔を真っ青にしていた……、

「それにしても、なにアレ、
あんな広範囲で威力がある攻撃見たこと無いよ」

「……わたしもや、

シャーリー、データは取れたか？」

模擬戦を見ていたはやては後ろでコンピューターを使ってデータを
取っているシャーリーに訊ねる

「えーと……、先ほど測定不能で、機械自体が壊れました」

「……う、うそーん……」

シャーリーの返答にはやてはムンクの叫びのようなとんでもない顔

になって頂垂れた

「それにしてもさっきから思ってたんだけど、一方通行君、

放置気味だよね、あの二人」

なのはは一人、訓練場内で戦場の中にも関わらず寝っころがっている一方通行を見ながらフェイト達に向かい言う

「うん……、そうだね

でもあの子、なんかウサギさんみたいで可愛い……」

フェイトは寝ている一方通行を見ながらクスリと笑う

「さてと、ではシグナム、」

「なんだ……、」

シグナムは相変わらずの余裕な態度で話かけてくる垣根に訊ねる

「まずは、俺の攻撃に耐え抜いた事をとりあえず賞賛しようか
普通の奴なら瞬殺なんだからな……」

すると、垣根はニヤリと笑みを浮かべゆっくりと口を開く

「俺のターンはひとまず終了だ、

次はテメェの最強の攻撃で掛かってきな」

すると垣根は両手を大きく広げてシグナムに対して挑発を始めた

「また、訳のわからない事を……、」

「スキだらけだよ……あれじゃ……」

模擬戦を見ていたフェイトとなのはは互いに頷く

「後悔してもしらんぞ垣根」

「しねえよ馬鹿、早く掛かってこいウストラトンカチ」

しかし、垣根は挑発的な口調でシグナムに話す

「な！私がウスラトンカチ……だと……！」

流石に今の言葉にカチンと頭に來たシグナムは、黒いオーラを纏い始め笑みを浮かべていた

「……ふふ……ふふ………」

わかった此処まで言うなら、もう死ぬ覚悟は出来ているんだろうな……垣根帝督」

するとさっきとうって変わり、なにやらシグナムの様子が可笑しくなっている

「あれ？シグナムさん非殺傷設定解除しちゃいましたよ、」

「にやははー…、これはもう本格的に戦争だね…、」

「二人混ざってないけどね……………」

あ…、寝返りうつた」

外で見ているフェイト達もこの状況を止める術はなくただただ観戦するのみだった

「行くぞ垣根エエー!!」

シグナムは剣を構えてそのまま垣根目掛けて直行する

「かかったこいや馬鹿野郎!!」

垣根はシグナムに向かって中指を立てて更に挑発する

「またしても侮辱して!!!!!!」

シグナムは剣を構えてそのまま垣根目掛けて直行する

「レヴァンティン!!カートリッジロード!!」

『ja』

「食らえ

飛竜！… 一閃ッ！！」

垣根目掛けて、凄まじい攻撃がシグナムから繰り出される

しかし、その瞬間、

逆に垣根は大きな笑い声を上げた

「ははははは…！！！！！！」

…この時を待っていた！！！！！食らえ秘技

最後の望み！（ラストホープ）！」

垣根は自分の目の前に可愛らしい服を着た女の子を目の前に召喚した

「…わーいって、

ミサカはミサカは垣根の前に飛び出してみたり!!」

少女は垣根の目の前でピョンピョンと跳ねて嬉しそうに笑っている

「ンだよ……騒がしいぞー、まだ終わらねえのかって………、」

騒がしくなった戦闘を見るために一方通行が寝返りをうつとそこには……、

「……………」

何故かそこにはいるはずもない少女……………

「打ち止め（ラストオーダー） ああああああああああ！！！」

一方通行は悲鳴の如く声を張り上げると瞬間移動をするかの如く垣根の前に立つ少女に向かい一目散に走る

「「「えええ！！」」」

そして、一方通行のあまりの変貌振りに思わず観戦していたなのは達は驚きの声を上げる

ビューン…カキーン

「何イ!!」

……ドカーン

こうして反射された飛竜一閃がシグナムに直撃する

「ぐはア!! 馬鹿な!! こんな奥の手が!!!!!!」

自分の飛竜一閃が直撃したシグナムはひとまず身体を引く

「ふん甘い俺の攻撃は終了してないぜ!!!!」

しかし、既に目の前には垣根が迫り、そして何やら黒い物質を手の平に乗せていた

「食らえ……………」

「くッ!!!!」

「必殺!!!! 墨汁ボンバー!!!!」

——ベチャ

シグナムの頭部にベツトリと黒い墨汁が染み付き髪が一瞬にして黒くベトベトになった

「……馬鹿……な……」

——ドサ

「髪がピンク色なんてのは邪道だ、せめて茶髪にしがれ……、」

こうしてシグナムととの模擬戦は幕を閉じたのだった

未元物質VS魔法騎士VS最強（後書き）

と言う訳で次回はていどくと一方通行に打ち止めが加わります

――では

六課とていとくん(前書き)

さて今回も色々と、ていとくんがやらかします

というよりコレを更新するのはなかなかしんどいですね

――では

六課とていとかん

——模擬戦終了後

「垣根クウウウン!!!!」

「ぎゃあああああ!!!!!!」

打ち止めを召喚した垣根は一方通行に現在進行形で散々と追いかけて回っていた

「デメエ、何あそこであんな手使いやがって!!」

死ぬ覚悟は出来てンだろうが!!……」

「やっぱり打ち止め大好きかこのロリコン!!」

だからテメエはいつまでもセロリなんだよバーカ!!……」

一方通行はこれでもかと言わんばかりに怒り狂っている様子だ

「死ねやコラァ! あン!」

「助けてー!!! フェイトちゃん!!!!」

「え? 私!!!!」

フェイトの後ろに隠れる垣根は盾にしながら一方通行をフェイトに押し付ける

「ええと…」

前方からのもの凄い威圧感、

こちらでも下手をすれば巻きぞいになるとフエイトは直感的に感じた

「どうぞ……」

フェイトは後ろに隠れていた垣根をすかさず一方通行の目の前に差し出す

「あ!!!!!!…テメ、寝返りやがつ……」

「垣根工工工工工工工工工工」

垣根は差し出された前方で指の骨を鳴らす一方通行の方へ顔をひき
つらせながらゆっくりと向く

「ぎあああああ！……」

その後、垣根の悲鳴が轟き渡ったのは言うまでもない……、

「……いやー話に聞いていた通り凄いですね垣根さんに一方通行さん
」！

「ああ、しかもあの二人、

シグナムを墨汁で黒まみれにして倒すなんてとんでもねえな」

シャーリーとヴィータは一方通行が垣根の首を捕み窒息させている
光景を見ながら苦笑いを浮かべて話している

「へえー、貴方打ち止め（ラストオーダー）って言うんだ」

「うんそうだよって！」

ミサカはミサカは誇らしく貴方に対してない胸を張ってみたり！」

一方、垣根が一方通行に殺されそうになっているなか、

楽しそうに打ち止めとなのはは仲良く会話をしていた

「……、ちょ！！…ヤバいギブギブ！！…、

ヤバい死ぬ！！首が逝く！！…、」

垣根は自分の首を締め上げている一方通行の手をパンパンと叩く

「一方通行君！！…ちょっとやり過ぎ！！顔が青くなってる！！…

なのはー!! はやてー!!、…ちよつと助けてー!!!!」

フェイトは手のつけられなくなった一方通行を止めるためとりあえずなのは達に助けを求める

「グフ……………、ガク」

「きやあああああ!!!!…」

意識を失った垣根の様子を見ていたフェイトは思わず悲鳴の声を張り上げる

「もう垣根をいじめちゃ駄目だよってミサカはミサカは貴方の背中に突っ進！！」

「……ブォー！！……何しやがるチビガキ！！」

するとさっきまでなのはと会話をしていた打ち止めが首を締め上げている一方通行を止めに入り、一方通行は垣根から手を離す

「ゲホゲホ……、あー……死ぬかと思った……
とりあえずナイスだ打ち止め……」

垣根は首元を擦りながら助けに入った打ち止めに礼を言う

「たく冗談が通じねえモヤシめ!!……」

「あん？」

一方通行の威嚇に対して垣根はすかさずフェイトの後ろに回り込み再び盾にする

「…、テメエ、どうやら本格的に死にてエようだなア……、」

「こら!喧嘩駄目だってミサカはミサカは貴方に対して注意してみ
る」

一方通行はそう言うと言筋を立ててフェイトを盾にする垣根に向かい脅しをかけるが打ち止めは一方通行の前に立ち塞がり怒るように言う

「ふん上等だ！やるかコラ！あん」

「垣根君、その状態からそんな風に言っても全然かっこよくないよ……？」

フェイトは相変わらず自分と打ち止めを盾に使う垣根に苦笑いを浮かべて言う

すると、ヴィータが何かに気付いた様にシャーリーに話し出す

「さっきから思ったんだけどさ、

はやての奴なんであんな端ッこで体操座りして落ち込んでんだ？」

「ああ……、あれはですね」

シャーリーは困ったような笑みを浮かべヴィータに続けて話し出す

「どうやら先程の模擬戦のデータを取っていたら、測定不能でコンピュータのシステムが完全に壊れてしまったらしくて、

弁償金を全額、自分払わされるから落ち込んでいるんですよ」

ヴィータは納得したように、ああ……、成る程、と頷く

「ありえへん……ありえへん……ありえへん……」

正しく、魂の脱けた屍である

「まったく、主にも困ったものだ」

「「うお！」」

どこから現れたのか、突如として話をしていたヴィータ達の横にシグナムが現れる

「いつの間に！」

ていうか未だに墨汁まみれか！」

「なんだ、そんなに大声を出して……」

そう言うときグナムの髪の毛から墨汁がポタポタと滴り落ちている

「にやははは……」

とりあえずお風呂に入ってきたほうが良いと思うよ」

その様子を見たのは思わず苦笑いを浮かべてグナムに話す

「おー…、シグナムじゃねえか、

やっぱり女は黒髪だな、似合ってるぜ」

「ケツ……、ただ単にテメエが墨汁頭に被せただけだろうがア……」

先程まで喧嘩を繰り広げていた垣根と一方通行の二人は現れた墨汁まみれのシグナムの方に歩いてくる

「……ふん！貴様！！…次は絶対に負けな…」

すると、垣根はシグナムの側にいきなり近付き、シグナムの顔の近くで匂いを嗅ぐ

「ななな！！…／／／／」

シグナムはまさかの垣根の行動に顔を紅くしていた

「うん…、やっぱりイカ臭い、

ヤベーな、未元物質で出す時、墨汁とイカスミ間違えちゃった」

——プチ

「死ねエエエエエエエ」

——バキ

「……あべし!!!!!!!!!!」

シグナムに殴られ、垣根の顎が上空にはね上がる、

——グシャ

そして鈍い音を立てて垣根は見事に地面に落下した

「…グフ…、

まさか、不意打ちとは…、

テメェホントに騎士か…」

「……う！うるさい／＼」

倒れる垣根に向かいシグナムは顔を真っ赤にして叫ぶ様に怒鳴った

「…クソ！！…貴様には必ずやりベンジを果たしてやる！！

覚えている垣根帝督！！…」

シグナムは顔を真っ赤にしたまま地面から立ち上がる垣根に向かい言うが

「御免、忘れた」

「お前、ふざけ過ぎだろ」

ヴィータもこの垣根の態度に対して思わず苦笑い

その後、垣根に一言叫んだシグナムは、頭に被ったイカスミを落とすため部屋へと戻っていった

「さて、と……、」

一段落着いた垣根の身体がピタリと止まる

そして、垣根の目線の先には隅っこで体操座りして暗くなっているはやての姿

「あれ？どうしたの？アイツ」

「ああ、ええとね」

垣根は何やら端っこで体操座りしているはやての理由をシャーーーに訊ねる

そして大まかな理由を聞いた垣根はニヤリと笑った

「オーイ、その精神放心のはやてくん？」

垣根は大声で端にいるはやてに大声で声を掛ける

「……なんや……」

「コンピューターなら先程、俺がとつくに未元物質で復元したぜえ」

「……………!!……」

はやての顔がみるみるうちに明るくなる

「ホンマか!!」

垣根の話聞いたはやては目を輝かせて喜んでいる

「いやぁ垣根はウチの救世主や!!」

「うん、うん、そうだろそうだろ……」

垣根は誇らしげに鼻を高くして喜んでいるはやてに向かい頷く

（（まぁ…、コンピューターがこわれたのは元々、コイツが原因
なんだけどね））

とフェイトと一方通行達は思ったがあえて口に出さないことにした

「——それで頼みがあんだけどよ……」

――

――

――

――そして次の日

「ねえエリオ！スバル！！昨日の模擬戦見た！！…、

まさかこの世にあんな非常識な人たちがいたなんて信じられないよね

あのシグナム隊長に勝っちゃうなんて」

「うん見たよ！！、凄かったよね！！羽から光線見たいなの出してたし」

「……でも一体どんな人たち何でしょうね、昨日は結局顔も合わせませんでしたし」

「さあ、わかんないかなー」

機動六課の面々、

スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、
エリオ・モンディアル、
キャロ・ル・ルシオ

は早朝からはやてに呼び出されブリーフィングルームの中で話をしていた

すると、その数分後

はやてはスバル達の前に満面の笑みを浮かべ現れた

「はやて隊長、こんな早朝から呼び出してどうしたんですか？」

「ええー、突然ですまんが、

実は今日からあんたらへの新しいの教導をする人を紹介したい」

ティアナの質問に対してはやては相変わらず微笑み答える

「では、垣根帝督さんこちらへどうぞ」

「えーてな訳で、

今日から、テメェらに色々と教える事になった垣根帝督です

好きな都道府県は島根県

嫌いな都道府県は鳥取県だ

……ちなみに俺の教導をサボった奴はボコします以上」

これが垣根帝督とスバル達の初の対面となった

六課とていとくん（後書き）

と言う訳で次回はスバル達はいとくんの教導を受けるということで次回は垣根が活躍します

――では

島根県と垣根（前書き）

ようやく更新出来ました……

——では今回は垣根とスバル達の初対面です

島根県と垣根

「てな訳で、テメエ等の教導を手伝うことになった垣根帝督だ

俺の事は教官、もしくは好きなように呼んでくれ

まあ……、俺的には出来れば帝督閣下かな？　なんかカッコイイし」

垣根はとりあえず適当に自己紹介を済ませる

（（（この人、なんで前回好きな都道府県を言ったんだろう）））

スバル達はいいい加減な自己紹介をする垣根に疑問を抱くがあえて口に出さないことにした

「すみませーん帝督庫先生ー」

「くおらあああああああ！！！！」

誰だ今帝督庫言った野郎は！！！」

すると何やら見知りのある白髪が何やらスバル達の後ろに座り手を挙げている

「缶コーヒーありませんかア？」

「あるわけねえだろ！！
死ねカフェ中！！」

：ていうか、なんでテメエが此処にいんだよ！！！」

「ん？暇だから」

一方通行は垣根に即答で返す

「そのまま帰れ!!」

垣根は妨害をする一方通行を一言怒鳴りつけると再びスバル達の方を向く

「あー悪い、とんだ邪魔が入った」

垣根はゴホンと咳払いをして再びスバル達に話し出す

「ほんじゃ、まず、これからお前等に教導する事になった訳だが、とりあえず、お近づきの印に俺からテメェらに渡したい物がある」

すると、垣根は部屋にある机の上に懷からカラフルな宝石を次々と置きだす

「これって…、もしかしてデバイス？」

机の上に置かれた宝石を手にとったティアナは垣根に向かい訊ねる様に聞く

「残念ながらちつとばっかし違えな、

これは俺の未元物質で産み出した兵器、その名もカキネス」

「なんじゃそりゃ……」

また訳のわからない事を始めた垣根に対して後ろに座っている一方通行は呆れた様に呟く、

「もしかして貴方は噂の……」

キャロは後ろで椅子に寄りかかり、机の上に足を乗せて腕を組んでいる一方通行の顔をまじまじと見る

「…あん？ ああ、

自己紹介がまだだったなア、

俺はあの馬鹿の連れで一方通行ってんだヨロシクなア」

一方通行はそう言うのと垣根を見ながら呆れたように話し出す

「しかし、垣根エ……、テメエ、俺が見ねエ間にまたそんなろくでもねえモン作ったんだア……？」

「ろくでもねえは言い過ぎだぜクソ野郎」

垣根は後ろで偉そうに座っている一方通行に人差し指を差して言う

「こいつはなあ、

俺が昨日、シャーリーからデバイスとこの世界についてのデータを
見せてもらってよオ、

…んでそのデータと俺の未元物質をまた演算し直して造った俺オリ
ジナルの代物だ、

俺って凄いよね！」

垣根は一方通行に自慢気に説明していると蒼髪をしたスバルが机の
上に置いてあるカキネスを一つ手に取る

「垣根教官！コレ！使って見て良いですか！」

「あん？当たり前えだろテメェらにやるために造ったんだからよ」

垣根がそう言うと言機の上にあるカキネスをティアナ達はそれぞれ手に取る

「よし、じゃあ！！」

「せえの！！！！」

「」「セットアップ！」「」

カキネスを手にとった四人はカキネスを握りしめ声を上げる

……しかし

——…シーン——

——…何も起こらない

声を張り上げた四人は手元にあるカキネスを見ながら首を傾げる

「垣根教官…これ壊れてませんか？」

四人は振り返りティアナが訊ねると、垣根は何やら怒っている

「なあ…お前等ふざけてんの？」

「」「」「え？」「」「」

まさかの返答にティアナ達は哑然とする

「何？セツトアップって？お前等馬鹿？馬鹿なの？」

そう言う垣根はティアナからカキネスを横取りする

「見てろ、手本を見せてやる」

垣根はそう言うとかキネスを天井に掲げ出し大きく息を吸う

——そして、

「島根県サイコォー——！！！！！！」

「「「ええ！！！！！！」」」

まさかの言葉にフォワードの四人は思わず目を丸くする

すると、垣根の手の中にあるカキネスが光り変形する

そして、現れたのは――

「これがカキネスのひとつその名も

ハイパー・カキネ・ランチャーだ」

――巨大な冷蔵庫だった。

「……………、使えるかアアアアア!!!!!!」
「」

――ガスッ

「……あぶー!!」

ティアナと一方通行は思わず垣根の後頭部に同時に拳を入れて声を張り上げる

「痛った!! マジ痛った! ヤバ、テメー!
頭を中心にクリーンヒットしたぞ今の!!」

垣根は頭を擦りながら殴った二人に向かい涙目に言う

「黙れテメエ! あんだけ格好つけて結局冷蔵庫か!!」

「そうですよ!! あんなの使えるわけ無いじゃないですか!!」

垣根を殴り飛ばした二人は涙目の垣根に向かい怒鳴りながら言う

「何言ってんだテメェら!!」

これ程素晴らしい兵器が他にあると思ってんのか!!」

「」「どう見たって冷蔵庫だろうがああ!!」「」

垣根は怒鳴り散らす一方通行達に呆れたように左右に首を振る

「わかってねえ……、わかってねえよテメェら」

「俺等にこれの素晴らしさがわかんなら、

明日にでも精神病院に入院確定だっつうの」

一方通行は独り言を呟いている垣根に哀れみの眼差しを向け言う

「……わかったよ、今からこの武器の素晴らしさをテメェらに証明してやる!!」

垣根はそう言うのとハイパー・カキネ・ランチャー（冷蔵庫）に近付き手を掛ける

「よく見てやがれ、これが俺の！全！力！だぁアアアアア……!!」

——ガチャ

——ピカァン

——ドカーン

カキネがハイパー・カキネ・ランチャー（冷蔵庫）の扉を開けると何やらもの凄い勢いで、莫大な大きさの光の閃光が、ティアナ達の間でブリーフィングルームの壁を貫き遙か彼方へと消えていった……、

「「「……………」」」

ティアナ達は目の前の出来き事に驚きのあまり啞然としていた

『ええーこちらは八神やてです!!』

なんか先程、ブリーフィングルームの方から高エネルギー反応が…
…、

って!! コンピューターがまたいかれとるウウウ!!」

——プツン

「「「なんじゃこりゃアアアア!!!!」」」

「見たか、これがハイパーカキネランチャーの……へぶし!!」

「何やってんだテメエはアアアア!!」

一方通行は何かを語ろうとした垣根の顔面を思いっきり殴り飛ばす

「デメエ！！また俺の顔面殴りやがって！！ふざんなよ！」

「何ですか……、あの冷蔵庫のバカみたいな破壊力は……」

ティアナは目の前の光景に啞然とするように呟く、

「で、でも凄いね！ハイパー・カキネ・ランチャー！
コレは使えるんじゃないかな！！」

スバルは苦笑いを浮かべて（冷蔵庫）を見ながらティアナに言う

「……あれは完全に質量武器でしょ……」

「だよねー……」

こうして垣根と一方通行はスバル達との初対面を終えるのであった
後にこの惨事はカキネ・ランチャー事件としてミッドチルダで広く
知れわたる事となる

「そんで？またコンピューターが壊れたのは、垣根がカキネスって
いう飛び抜けてとんでもないデバイスを造ったのが原因な訳やな」

ブリーフィングルームの壁を破壊した垣根と、その場に居合わせた
全員は青筋を立てているはやてから呼び出されていた

「反省はしている、だが後悔はしていない、
何故なら満足しているからだ」(キリ

「なあ……、ホンマに一発本気で殴らせてくれへん？」

はやては、めちやくちな垣根に対して完全に怒りを露にしていた

「まあ、良いじゃねえか壊した所は俺が一瞬で直してやったんだからよ、そうカリカリしなさんな……」

「そう言う問題じゃねェつつうのこの馬鹿！」

「うん！今回は流石に垣根が悪いかなあてミサカはミサカは貴方に對して指摘してみたり」

「ははははは……、」

開き直る垣根に対して一方通行達は思いっきり指摘し、打ち止めの隣にいたフェイトは苦笑いを浮かべていた

「全く何考えとるのだ貴様は！」

ホントにただの馬鹿なのか？」

すると、はやての隣にいるシグナムも反省の姿勢が見られない垣根に対して呆れたように話す

「ンだど？ テメエ、
そのデケェ乳揉むぞコラ……」

「ッ……、
／／／
」

するとシグナムは顔を真っ赤にして自身の胸部を右手で押さえる

「……ッたく冗談だつてえの、バーカ」

「斬り殺すぞ／＼／貴様!!」

垣根はそんなシグナムをケラケラと笑い馬鹿にしていた

——とその時、

垣根達の耳に響く様に局内で緊急事態を知らせるアラートが鳴り響く

「ンだ？このうるせエ音は？」

「はやて、これって……」

「……間違いない敵や！」

はやては血相を変えてその場にいる全員に向かい言う

「マジかよ、ならこの機会に、遂に俺が開発したカキネスの实力が……」

「よし皆！張り切ってガジェット達を撃退してき！！」

「オイ聞けよコラ」

またろくでもない事を垣根が言い出す前にはやての言葉に全員頷くと一目散に駆けて行く

「あー！！待てやコラ！カキネス持っけてメエら！！」

「垣根ってなんか可哀想ってミサカはミサカは同情してみたり……、」

打ち止めは哀しみの籠った眼差しを、
六課の跡を追う垣根の後ろ姿に向け呟く

「そうだなア……あいつ心配だから、俺もとりあえずいつてくるわア」

そして、一目散に現場に向かう六課と垣根に一方通行はめんどくさそうに眩き跡を追っていった

島根県と垣根（後書き）

次回はとりあえずていとくんと一方通行が暴れまくりです

――では

戦闘(前編) (前書き)

えーと……、相変わらずグダグダですが更新させていただきます

――では

戦闘（前編）

――あれから三十分後

なのは達はガジェット達のいる現場に到着した

「おーおー沢山いやがるな」

――ミッドチルダ郊外、

アイゼンを片手に目の前にいるガジェット達を見ながらヴィータは
笑みを浮かべる

「ほんとだ……、」

現場に着いたなのはは目の前の光景に驚く

「まさか、ガジェット達がこんなにも多いなんて……、

この辺りに確実にロストギアがあるって事かな」

ヴィータの隣にいたフェイトは非常に多いガジェット達を見て推測するように呟く

「……、へえ……コイツ等がガジェットって言うのか」

すると、呟いていたフェイトの真横にいきなり六枚の羽を生やしている垣根が突然現れた

「うわ!! 垣根! いつの間に来やがった!!」

「……、ウツセえな、ついさつき着いたばかりだよ、ほら野郎もあそこに居るぜ」

垣根が指を指す方をフェイト達が一斉に見ると何やら見覚えのある人影……、

白髪の髪の毛に細く白い肌、

一方通行が一人、ガジェットに向かいポケットに手を入れたまま無防備な状態で歩いている

「あんな無防備で歩いていくなんて……！ガジェット達に返り討ちにされるよ……！早く助けに行かないと……、」

「まあまあ慌てない見てな……」

「なんだと？」

一人ガジェットに歩いていく一方通行を助けに行こうとするフェイトを制す垣根にシグナムが首を傾げる

「……さてと、テメエら鉄屑どもに用はねエ、

とつと消し飛してやるからよオ」

ガジェット達は歩きながら話す一方通行に弾丸を撃ち込むが全て反射されている

「何アレ凄い」

「アレが野郎の能力、ベクトル操作だ」

垣根がガジェット達の攻撃を弾き飛ばしている一方通行を見ながら驚くのは達に話す

「ベクトル操作？」

「この世にあるありとあらゆるベクトルを操作出来る能力だ

例えば、空気中の大気の流れ、地球にある重力、そして人間の中にある血液の流れとかな」

「まさか……、そんな事……」

「現に今、目の前で起こってるんだから

俺の話を信じる以外、どうしようもねえだろ」

啞然と呟いているヴィータに対して垣根はとめんどくさそうにため息を吐く

「……………」

なのはは手元にあるレイジングハートを握りしめ一方通行がガジェット達を一蹴している光景を見て沈黙する

「貴方達は……………」

「あん？」

「……、貴方達は以前いた世界でもこんな風に使っていたの？」

なのはの質問に垣根は口元を緩め笑みを浮かべる

「……、ああ使ってたぜ……とびつきりな……」

なのはの質問に返答する垣根はなんだか哀しい目で戦っている一方
通行を見つめる

「散れや三下ア……」

——爆風と爆音……、

一方通行の視界に入るガジェットは次々と吹き飛んでゆく

「よし私達も一方通行さんを援護するよスバル、エリオ!!」

「わかった!!……」

「はい!!」

一方通行の戦いを見たティアナ達は援護するべくガジェット達の殲滅に加わる

「あー！！…アイツ等！！いつの間に！」

「こうしてはおれん！私達も戦列に加わるぞ！！！！」

シグナム達もティアナ達に続き戦闘に次々と介入し始める

しかし、垣根はその戦闘には参加しようと思わず黙って壊されていくガジェット達を眺めていた

「……、どうしたの？垣根？」

「……おかしい」

垣根は目を凝らす

（妙だ…、こんな数を導入しているにも関わらず、未だにレリックを見つけてねエ訳がねえ）

垣根と同じく地上にいた一方通行もこの事態に疑問を抱いていた

「はあああ！！」

「いくぞ！……紫電！……一閃！……！」

「バルディッシュュ!!!!!!」

しかし、一方通行達の不安と裏腹にシグナム達は次々とガジェットを破壊していく

「はぁアア!!!!!!」

——ドカーン

しなやかな動きに、破壊力のある魔法攻撃、

戦闘を開始して数分もしない内にガジェット達は全て破壊されてし

まった

「これで、大方片付いたな」

「……………、さて」

戦闘が終わり掛けた直前、シグナムは険しい表情で話すヴィータを制す

「……、何か聞こえる」

——ピィガチャガチャ

『あー…、あー…、もしもし…、』

しばらくして、壊れたガジェットの一機からノイズ音が聞こえる

『あーあー…、マイクのテスト中ー』

声は段々とはっきりと聞こえてゆく

『おっ！…どうやらはっきり繋がった見てエだなあ』

なんだか訳が分からないが聞こえてくるのは男の人の声だ

「な！！、なんだコレは！！…」

「何！！！一体！！！」

『ええー、そこにいるミジンコどもに告ぐ、』

音は急にスピーカーに変わり辺り全域に声が響き渡る様に広がる

『デメエらがさがしてるレリックとやらは俺等が頂きましたアー』

男の声は愉快に笑うかの如く戦場に鳴り響く

フェイトはバルディッシュを握りしめ耳を凝らす

（この声、スカリエッティじゃない！！！！）

『つうことだから今からお前等を俺が全員ブチコロします以上、』

その声を聞いた一方通行と垣根はその声を聞いた途端その主がわかった

「ああ……、なある程なア……、」

一方通行は一人納得する様に呟きながら笑みを浮かべている

「オイオイオイ、
マジかよ………」

この声を聞いた垣根も驚きが隠せない

「どろどろ……」

なのははガジェットからの声を聴いて表情を変える垣根に訊ねる

「まさか…、アイツが此所に来てやがるとはな……、」

しばらくしてガジェットを殲滅した残骸の先から足音が聞こえてくる

先程まで戦闘をしていたシグナム達はその足音がこちらへ近づいてくるのがわかった

「……………ッ、」

——不気味な寒気が機動六課全身を伝う

「まアさかよー……、

こーんな所でまた会うなんて思ってなかったぜえ、なあオイ」

――
純白の白衣の下に狂喜の笑みを浮べて顔にタトゥーがあるその男――

「木イイイ原くウウウウウウン!!」

戦闘（後半）（前書き）

——木原と再開する一方通行は果たして——

——では

戦闘（後半）

一方通行達の前に現れた男、

「ヨォ…、ひさしぶりだなァ…一方通行」

——木原数多は以前と変わらぬ悪人染みた顔に白衣を纏い狂喜の笑みを浮かべて笑っていた

「くそムカつく顔があったと思ったらやっぱりテメェだったかァ…」

木原は笑みを浮べて一方通行をギロリと睨み付ける

「相変わらずその生意気顔見るとぶち殺したくなるなァオイ」

木原はゴキゴキと首の骨を鳴らす

「木原クンよオ……、俺がせっかくミンチにして殺ったのに生きてなんてなア……、

次は肉片も残らない程、スクラップにしなきゃ駄目みたいってか？」

木原の前方に立つ一方通行もその場にいた全身が凍るような殺気を込めた言葉を木原に返す

「そう焦んなよオ……、

真っ先にテメエからぶち殺してやるからよオ安心してろクソガキィ！
！」

「安心してろ数秒でスクラップだア

木イイイイ原クウウウンン！！」

一方通行がそう言う足のとベクトルを変えて一気に木原との間合いを詰める

（終わったなあのおっさん）

と襲いかかる一方通行を見た垣根は思ったがそれは大きく裏切られる

「デメエも懲りねえガキだな」

――バキ

「チィ!!!!!!」

「何!!!!!!」

木原の拳が一方通行の反射をすり抜け顔面に入る光景に垣根は思わず声を上げる

が直撃ではなく一方通行は右頬を右手でシツカリと防御して防いでいた

「……ハ！！、流石に読んでやがったか」

「前にイヤられた手なら何度もやられねエよオ」

木原の攻撃を防いだ一方通行はニヤリと笑みを浮かる

「……、おっと」

——ブウン

すると、次は木原の真横からシグナムが剣を振り下ろし木原は軽々

とそれを回避する

「オイオイ……、嬢ちゃんこんなもの振り回すなんていけねえなあ……、

ぶち殺したくなっちゃまったじゃねえか」

「フン、上等だ!!」

シグナムは振り下ろした剣を続けて再び木原の横腹に入れる

——…が

——パァン

「駄目だったただろ？調子に乗ったらよお」

「……ぐウ」

目にも留まらない木原の素早い蹴りがシグナムの顔面を捉え吹き飛ばす

「……チィ（やっぱり無理か）」

一方通行は思わず舌打ちをして平然としている木原を見つめる

すると次はクロスミラーージュを持ったティアナとリボルバーナックルを持ったスバルの連携攻撃を仕掛ける

「いくよ!! スバル!!」

「うん!!」

ティアナは銃を構えてターゲットの木原に向ける

「いつけエエエエ！……！」

とトリガーを引こうと指を掛けた直前、

ティアナはふと横から人の気配を感じる……、

「いけねえなア…、ガキがそんな玩具持ってたらよお」

——そう

木原は既に銃を構えているティアナの真横に移動していたのだ

——バキメキドコ

「グハア!!!!!!!!!!」

肋骨、みぞおち、顎を順に打ち上げられトドメは回し蹴りを脇腹

ティアナの身体はそのまま壁に叩きつけられて力なく倒れた

「ティアナ!!!!!!」

「ついついブチ殺したくなるんだよ俺がなあ……」

木原はそう言っていると頭を押さえながら高々に笑い声を上げる

「なんて奴だ!クソ!」

悪態を吐きながらヴィータは手元にある愛機アイゼンを構える

「これならアアアア！！！」

そしてヴィータは高々に笑い声を上げる木原目掛けて振り下ろし襲いかかる

……だが

「デメエもバカだなあ……、

んな大降りな武器なんて数歩歩けばかわせんだったの」

木原はそう言うときアイゼンを振り下ろす直前にヴィータの顔面に既に右ストレートを入れていた

——バキン

「ぐあああ！！！！」

ヴィータは木原にそのまま殴り飛ばされ壁に打ち付けられた

「なんだよ雑魚ばかりかア……、

んじやとつとと殺すかな」

と木原が振り返ろうとした瞬間、右頬に何かが擦り視界には蒼髪の少女が入ってきた

「よくも皆を！！！！」

「フーン、お疲れ様……、

そして、死ね」

——ゴキリ

「――ガハア」

何かが砕けた音と共にスバルの懷に木原の拳が入り崩れる様に倒れる

「スバルさん！！クソオ」

すると次はエリオが木原に目掛けてデバイス、ストラードを構えて
直行する

「駄目！！エリオ！！…」

キヤロがエリオを止める様に声をかけるが時は既に遅く、もう木原
の前まで間合いを詰めていた

「うわああアア！！！！…」

——ビュン

「あめえなア…ガキイ」

——バキ！！メキ！

「ガ！…グう…」

脇腹に蹴り、そしてみぞおちに一発、

エリオは思わず木原の前でうずくまる

「邪魔だボケ」

——…ガッ

そして、最後のトドメは、うずくまったエリオの顔面目掛けて放たれた素早い蹴り

「エリオォー!!」

目の前の悲惨な光景にフェイトは思わず名前を叫ぶ

「なんなのあれ……」

目の前の光景になのはも絶句するしかない、

目の先であつという間にやられていく仲間達の光景

その様子を見た垣根はそんなのはに向かい口を開く

「オイ……、なのは……」

「……、え？」

突然の呼びかけに戸惑うのは、

「……地上にいる倒れてる奴等連れて逃げろ」

垣根は真剣な顔立ちで木原と戦闘を繰り広げているシグナム達を見ながら言う

「君と一方通行は、いったいどうするの」

「……時間を稼ぐ、」

垣根は一言そう言うと更に大きく六枚の羽を開いた

「バルディツシュー!!」

——ブン

木原はいきなり仕掛けてきたフェイトの攻撃を何事もなく避ける

「答えなさい!! いったい貴方は何が目的なの!!」

——ガチャ

攻撃をかわされたフェイトは再び武器を構えて木原に向かい訊ねる

「木原ア……、テメエ…

なんでここに現れてまた、何を企んでやがる!!」

「——レムナント残骸」

——ピタッと一方通行の動きが止まる

「一方通行テメエならわかるよなア？」

木原は動きを止めた一方通行に対して嬉しそうに笑みを浮かべて更に話を続け始めた

「レリックだったか？アレイスターによるとアレさえあればツリーダイアグラムの復元も簡単に出来るみたいなんだわ」

木原は笑みを浮べて愉快そうに喋る

「……でこの世界になぜ俺がいるかって？

それはな、学園都市にあった四散した俺の身体をアレイスターが集めてこの世界にいるスカリエッティがレリックを使って復活させた……とだけ説明しといてやるよ」

木原はそう言う一方通行の隣にいたフェイトを見て更に話し出す

「――でもよオ今までで一番傑作な光景だなァ…、

クククク……、まさかよオこんなシュールな画が見れるとはな思わなかったぜ一方通行」

「それはどういう……」

——ズドーン

フェイトが妙な発言をした木原に対して質問しようとした瞬間……、

頭上から勢い良く一方通行達と木原の間に落下し辺りに爆音が響き渡った

「……、さあて助っ人参上ってか？」

木原は突如、目の前に現れた人物に驚く

「暗部組織、スクールのリーダー……、

未元物質……学園都市第2位、垣根帝督!!」

「これはこれは、アレイスター直属の部隊、

獵犬部隊の木原数多さんじゃないですか」

六枚の羽を広げた垣根は羽をバサバサと鳴らして笑みを浮べていた

「成る程なア……、アレイスターが困難だと言ってただけの事はあるな

流石にこの二人相手だと俺もちつとばっかしきちいな

「コレは今回は退いておくとするか」

「随分と引き際がいいんだな」

垣根がそう言うのと木原は睨み付ける

「……勘違いすんじゃないぞ…、

テメエ等はいずれ俺がブチクロス、次は脳味噌引き抜いてスクラップにしてやるから覚悟しとけよクソガキ共…、」

木原はそう言うのと踵を返し一方通行達に背を向ける

「ああ……、それとフェイトつつたか？

テメエの横にいるシロモヤシにせいぜい引きちぎられて殺されないようにな…、」

「木イイイイ原アアアアア！！！！」

——ドカーン！！

一方通行は叫び声と共にあらゆるベクトルを操作して木原の立っていた場所に向かい攻撃を仕掛ける

「カハハ！！！！じあなアクソガキィィ！！！」

木原はそう言うとその場から姿を消す様に去っていった……………、

戦闘を終えて（前書き）

すいません更新遅くなりました

――では

戦闘を終えて

――管理局内

なのは達は木原が立ち去った後、

ボロボロにやられたスバル達を運び一段落ついていた

「よかったな、誰も死ななくてよ」

垣根は陽気に笑みを浮べて、椅子に座り落ち込んでるフェイト達に声を掛ける

「……どこが？みんなあんなに殴られたり蹴られたりしてボロボロになってるのにどこが良かったの？」

しかし、フェイトはその垣根の言葉に逆に怒りを露にしていた

「じゃあ、聞けけどよテメエらは戦場に出向く時に怪我をしねえで帰って来れるとでも思ってたのか？」

「そ、それは……」

垣根は言葉に詰まるフェイトの胸ぐらを掴み引き寄せる

「あハハハ……、傑作だなお前、久しぶりムカついたぜ……、

とんだ甘ちゃんだ……」

垣根は眉間にシワを寄せて青筋を立てる

「……いいか良く聞けテメエもアイツ等も考え方が曖昧だ!!」

んな野郎が戦うなんざ百年かかって無理なんだよ!! クソツタレ
!!」

垣根はそう言うとフェイトの胸ぐらを掴み壁に叩きつけた

「気分が悪イ、俺はもう寝る」

垣根はそう言うのとポケットに手を突っ込み、

フェイト達の前から早足で部屋へと消えていった

「ねえ……、一方通行君、一体あの人は誰なのかな？」

なのはは椅子に腰掛け真剣な眼差しを一方通行に向けて訊ねる

「あア…、野郎は……」

と話し出そうとした一方通行は思わず口を閉じる

「……、只の頭の可笑しなマッドサイエンティストだ」

一方通行はそう言うとき哀しげな表情で笑みを浮かべる

「……、話せない？」

なのはが訊ねると一方通行は頷く

「悪いな………」

一方通行は一言そう言うときフェイトとなのは達の前から立ち去っていった

「あの二人……」

フェイトは哀しげな表情を浮かべて呟く

「うん……、あの二人にはどうやら悲しい過去があるみたいだね……」

なのははフェイトの言葉を肯定するように話す

『あのシロモヤシに引きちぎられて殺されないようになー!!』

（……あの人は笑い声をあげながら話していた……一体どういう……）

「なんやどなんしたん二人とも、深刻な顔して」

通路の向こう側からはやてが現れて椅子に腰掛けて表情を曇らせているフェイトとなのはに訊ねる

「うん……なんでもない、それよりはやて、皆はどうだった」

「みーんな、強打で骨をやられとるしばらく安静やな」

「……、そんな」

はやてのまさかの言葉になのは達は啞然とする

機動六課の戦力が著しく低下している事は今後の任務に支障がでる

「まあ、これじゃ仕事はしばらく出来んってことや……」

フェイト達は思わず深いため息を吐く

「でも……、皆が一瞬であんな風にやられるなんて……」

「それに反射する筈の一方通行の能力が効かなかったよね……」

なのは達は戦闘の疑問点を次々と挙げる

「せやな……、

あの二人には欠点もあるって事がわかったし」

二人ははやての言葉に納得するように黙って頷く

そして、俯いていたフェイトは何かを決心したように重い口を開いた

「決めた！

私、明日でいとくんに謝る！」

いきなりのフェイトの発言になのはとはやては驚く

「ど、どなんしたんフェイトちゃん」

「ビックリしたよオ、今!!」

フェイトの近くにいた二人は思わず声を上げる

「…私、今回の事でやっぱり考え方が甘かったと思った」

フェイトは二人に対して話を続ける

「……だから明日でいとくんに謝ってじっくり話そうと思う
ていとくん達に何があったのか、そして私自身の事も……」

フェイトは決意を込めた眼差しを二人に向ける

「うん…、そうやな、

あの二人はまだ何か深い闇を抱えとる」

「…確かに、私もせっかくだからあの二人について色々知りたい」

フェイトの一言に二人は賛同し互いに頷く

「決まりやな、明日二人を呼んで五人で話し合おう」

「「うん」

――

――

――

――翌朝

「ンだよテメエら、

急に呼び出しやがってエ」

「それで俺達に何の用だ？」

垣根と一方通行ははやて達に呼び出され不機嫌そうに口を開いていた

「ごめんなあ二人とも

実は二人の事について私達は話がしたいんや」

はやてはそう言う和不機嫌な二人に微笑み掛ける

「それでなんだよ話したい事ってのは」

垣根が不機嫌そうにそう言うとはやての隣に立っていたフェイトが
一歩前に出てきて急に垣根達に頭を下げた

「ごめんなさい、昨日の事、

ていとくんに言われて私、気付いたの自分自身の覚悟が足りない事に……」

フェイトは重苦しい表情で垣根と一方通行に頭を下げて話す

すると隣にいたはやてやなのはも続けて頭を下げて話を始める

「ホンマにうちも申し訳ないと思う」

「わたしもだよ……」

するとその様子を見た垣根は微笑み、頭を下げているフェイトの肩に手を添える

「……いやなんかごめんねー、

まさかここまで真剣になるとは正直思わなかった」

「「「……」」」

この垣根の一言にその場が凍りつく

「なァ垣根、お前エシリアスって言葉、知ってるか？」

「え？なにソレ食えんの？」

その言葉を聞いた四人はガツクリと項垂れる

（（なんて奴だコイツは……）（）

と思わず殺気立ってしまうがとりあえず表情に出さず心の中で抑える

「ま、まあ、そういう訳やから、な？垣根君に一方通行君」

「は…？何？どういう事？」

「垣根エとりあえずテメエはもう喋んな」

場を混乱させる垣根をとりあえず一方通行が黙らせる

「わかったよんで俺達を呼んだのはそれだけじゃねえんだよなア」

一方通行がそう言うとはやて達は互いに頷き口を開く

「……実は君達に元の世界で何があったのか知りたい」

——ピクッ

その言葉を聞いた二人は思わず反応する

「……一方通行」

「あア？別に良いだろ話しても、

その代わり話を聞いて俺達を軽蔑するかも知れねえけどなア……」

一方通行がそう言うと隣に立っていた垣根がゆっくりと口を開く

「一方通行、とりあえずテメエは外に出てた方が良いだろ」

「ああ、そうだなァ…、確かにテメエの話を聞いてエ不快になるのは御免だァ…」

一方通行はそう言うど踵を返して部屋から出て行く

——ガシャン

「いいの…？垣根君？」

「……ああ、あいつがいいって言ってやがんだから良いんだろ？

じゃあ話すぜ……」

「そ、んな……」

話を聞いたフェイトは驚きを隠さないでいた

話を聞いた後の二人は涙を流している

「……あいつも俺も人を殺して、生きてきた、そういう風にしか生き方が無かったんだけどな……」

「二万人以上の命をそんな理由で一方通行君に殺させるなんて……」

フェイトは力なくその場に座り込み両手で顔を覆う

「俺も大概殺して来たがな、……けど俺達の世界ではそれが当たり前のように行われてたんだ……、

今はアイツと俺は和解したんだけどな」

話をした垣根は哀しげな表情を浮かべる

「垣根君……冷蔵庫……可哀想……」

「お前今ので、シリアス台無しだぞオイ」

垣根は涙を流しているはやてに青筋を立てる

「……グス、でもありがとう、ていとかん話してくれて私、後で一方通行君とゆっくり話してくる」

「ああ……、できればそうしてやってくれ」

垣根は涙目になっているフェイトに微笑み言う

フェイト達はこれでまた一つ垣根と一方通行について知る事が出来たのだった

一方通行（前書き）

——なんか短い！！

——では

一方通行

「……ツチ」

一方通行は夜風に当たりながら夜景を眺めていた

（俺みたいな悪党が此処にいること自体場違いだったのはわかったことじゃねえか……）

一方通行は自分自身の白い髪の毛を片手でワシャワシャと掻く

「……一万人も殺してエ命を奪っておいて

まだ俺には救いがあるとしても思ってたのか、情けねエ話だなアオイ」

一方通行は哀しげな表情で一人寂しく呟く

「いいんじゃないかな思っても……」

「……ン？」

一方通行は後ろから突然の声に思わず反応する

「なんだア…、テメエか、聞いたんだろオ？俺について垣根からよオ……」

「うん…聞いたよ君の話……」

一方通行の前に現れた少女、フェイトは優しく微笑み答える

「…………、打ち止めちゃんからも話を聞いたよ、

貴方はとっても心が優しい人だって」

「……………」

フェイトの言葉に一方通行は再び夜景を見ながら黙り込む

「私は今、笑ってる君しか見てないからこんなことしか言えないけど貴方はとても優しい心がある」

「……め……ろ」

一方通行は拳を握りしめフェイトに背を向けたまま俯いて震えていた

「デメエに何が……!!」

「……わたしもクローンだったの」

その瞬間、振り返った一方通行は押し黙り啞然とした

「な……!!」

「そう……、プロジェクトによって作られたクローンだった……」

フェイトは相変わらず哀しげな表情で話を続ける

「だから普通なら私みたいな子達を沢山殺した貴方を許せないと思うかも知れない
でも違うの……、貴方は殺したその子達の方だけこの世に生きている他の子達の為に戦った

だから貴方はそんなに自分自身を責めたりしないで一方通行」

「…………お前エ……、」

フェイトは言葉の一つ一つに重い何かを込めて話す。

その言葉の一つ一つが一方通行自身が背負っていた物を少しだけ軽

くした気がした

「……、フン…わざわざ…ありがとなア…」

一方通行はそう言うと話をしてきたフェイトにお礼を言う

「なんかアよオ…少しだけ軽くなったわア…」

一方通行はフェイトの頭にポンと手を置く

「ふえー／＼／＼」

「ホレ、戻るぜエ風邪ひいちまうからなア……」

一方通行はそう言うとフェイトを連れて屋外から局内へと入って行った

――病室前

はやてとなのははシグナム達のお見舞いの為にやって病室前まで来ていた

しかし、何故かその病室からは笑い声が絶えないうでいた

「何笑ってるやみんな？」

「さあ」

外にいた二人は顔を見合わせて互いに首を傾げる

——コンコン

「入るで皆ー」

病室にいた全員は腹を抑えて爆笑している

「な、なんやみんなどなんしたん？」

「いや、あ、か、垣根が……、

ぶは、あー駄目だ笑いが……ククク、」

ヴィータは必死に笑いを堪えるが耐えられず思わず吹き出す

「おー大将、いったいどうした？」

「垣根こそこで何をしてるんや？」

はやては呆れたように病室で騒ぎの原因になってる垣根に向かい訊ねる

「あー…ホラ、俺はアレだ、皆に島根県の素晴らしさを……」

「何がアレなのか全く分かんないんだけど、

島根県の素晴らしさを証明していったいどうするの？」

なのはは馬鹿みたいな事をしている垣根に呆れたように話す

「は？ 島根県知らねえの？」

四十七都道府県の一つだぜ？」

「いや私はなんで島根県を推すのか聞きたいだけなんだけど」

意味の分からない垣根の返答になのはは悪戦苦闘する

「うわァ…、ないわァ…、

島根の垣根つつたら俺だろうが!!」

「「意味不!!…ッブハハハハ」」

（だ、駄目だ……何かみんな垣根に洗脳されてる）

病室にいる皆の反応についていけない二人は疲れたように肩を落と

した

「てことでテメェらに次は一方通行の話をしてやろう」

垣根は微笑みはやて達を含めた全員に話をし出す

「あいつは白い髪の毛に悪人染みた顔の男自称最強とか言ってるけど、

実はロリコンつつうとんでもねえギャップ……」

——ガシャーン

「かアきねクーン…?」

「……てのは嘘で…！ いやちげえし！ マジちげえし！

だから、その振り上げたベッドを降ろして下さい！」

垣根は背後から突如病室のベッドを片手に現れた一方通行に思わず土下座をする

「こらこら！ 駄目だよ一方通行ベッド持ち上げたりしたら」

「…だってよオ……」

ベクトル操作でベッドを持ち上げて垣根を襲おうとする一方通行にフェイトは宥めるように言う

「…いいからホラ、ね？」

「……チツわかったよ」

一方通行はフェイトの言葉に渋々手に持ち上げていた病室のベッドを降ろす

「うわぁ怒られてやんのー、だっせ一方通行ー…」

「病室で騒いだていとくんは後で説教ね」

「ナンテコッタイ」

何か黒い雰囲気を纏うフェイトの一言に垣根は愕然と項垂れる

「様ア見やがれ垣根エ!!!! カカカカカカ」

「ちょっと! 病室では静かにしなさい! ってミサカはミサカは貴方の態度を注意してみたり」

「:はいスイマセン」

(何コイツ可愛い／／／)

そして、垣根が注意されてハシャイでいた一方通行も打ち止めから怒られて落ち込み

その姿になのは達は思わず胸にキュンと締まる

「ま、まああれやね／＼／
皆元気でよかったわ」

「そ、そうだねー…にやははー…／＼／」

なのは達はこの状況に思わず苦笑いを浮かべる

「よしこれで一方通行珍会議は終了だ、ゆっくりと休めよテメエら!!」

「かアきねエー…死にてえのかテメエはア…」

「まあまあ………」

こうして垣根と一方通行達はそれぞれ病室を後にする

「にやははー…、みんな安静にね」

「じゃあ、シグナムしっかり休んでな」

「ありがとうございます主」

病室を立ち去るのは、はやてにシグナムはお礼を述べる

「エリオもティアナさん達も早く良くなって下さいね」

「わかってるわよ」

「うんお休みーキャラ」

同じくキャラも仲間達に手を振ると病室をでて行く

「じゃあねみんな」

そして、最後には垣根と一方通行を抑えていたフエイトが一言

こうして六課の夜は更けて行くのだった

ていとうんとお買い物（前書き）

——今回はていとうんと休暇の話です——

ていとおんとお買い物

——翌日

「隣のかつきね〜かつきね〜♪

かつきねかつきね〜♪」

「打ち止めちゃん、

それト〇口の間違いじゃないかな？」

一方通行の隣で楽しそうに歌う打ち止めに苦笑いを浮かべてフェイトは突っ込む

——ミッドチルダの街中、

フェイトとなのは、垣根、打ち止めと一方通行達は六課の活動が再開するまでの間しばらく休暇をもらった為、この町に買い物に来ていた

「れ〜い〜ぞ〜このな〜かに♪

昔から住んでる♪」

「打ち止めちゃん？

次歌ったら口に未元物質突っ込んだじゃうぞー？」

「ン〜…、そオンな事したらテメエの体を即行で冷蔵庫に変えるけどなア垣根クウン？」

隣で楽しそうに歌っている打ち止めに垣根は思わず苦笑いを浮かべ、その隣で歩いている一方通行はそんな垣根に笑顔で返す

「…うわぁん!! 一方通行がいじめるよオおかあさぁん」

「にゃははー…よしよし」

（…子供かッ!!）

泣きながらなのはに慰めて貰う垣根に隣にいたフェイトは心の中で思わず突っ込みを入れる

「…で？…買い物って何買うんだア？フェイト」

「あ、うん、とりあえず貴方達の衣服とかかな？」

訪ねてくる一方通行にフェイトは街を見渡し答える

「そんじゃ、手っ取り早く買い物終わらせる為に二手に別れよかー
…」

はやては頃合いを見計らって突如その場にいる全員に提案し始める

「ウチは一方通行とフェイトは打ち止めちゃん、なのは垣根ってこと……」

「……ち！ちよつとまったー！！」

はやての提案を遮りフェイトが声を上げる

「なんやー…、フェイトちゃん？（……チツ余計な真似を）」

「なんやー…、じゃないよ！

ズルいよはやて！！私だって一方通行と……その……」

（はい来たーベタな展開）

はやての言葉を遮り何かを話そうとするフェイトの姿を見て垣根は
心の中で呟く

「……なんだァ？別に皆で一緒でもいいだろ……」

「「駄目！」」

「えー……？」

一方通行は二人からの返答に思わず啞然とする

「フェイトちゃん！ウチのセンスがあれば一方通行君にもカッコイイ服を提供出来る！」

それにこの街も案内もお手のものや！！」

「それだったら！…、わ、私だって服のセンス良いし！それにはやての知らないこの街の色々などこ知ってるもん！」

はやての言葉に負けじとフェイトも頑張って言いつ返す

「服のセンス？なら俺に任せろ！」

「……テメエの選ぶ服はほとんどメルヘンだろオが」

その垣根の言葉に呆れたように一方通行が返す

「大丈夫だ自覚はある」

「少し……黙ろうか？」

「はいスイマセン」

涼しい笑顔のなのはに訳の分からない話をしていた垣根思わず頭を下げて謝る

それから数時間、はやてとフェイトは互いに譲らず眉間にしわ寄せて言い合った挙げ句、

「だからね皆で一緒に楽しく回ろうってミサカはミサカは貴方達に

諭してみる」

の一言で結局は決着がついてしまうと言うしようもない結末になってしまった

「……っつか結局こうなのかア？」

「オウオウ、一方通行両手に花だねえ」

垣根はフェイト達に両脇から両脇を組まれている一方通行を茶化す様に言う

「よく言うぜ俺的には両腕に核弾頭……」

「……一方通行クウン？」

「いや…なんでもねえ…」

一方通行は二つの殺気だった威圧感に滑りそうになった口を閉じる

「……、いやあやっぱ女ってこえーわ、メモしとこ」

垣根はそう言うとメモ帳に記入してしまう

こうして楽しい休暇の買い物は始まった

――

「コレなんかどうかな!!」

「うわぁ確かにカッコエエなあ……、」

――とある店内

はやてとフェイトは互いに選んだ服を見せ、一方通行に合うものを選んでいた。

「コレなんかどうかな!!」

「デメエはネバーランドに帰れメルヘン……」

一方通行はノリノリで服を持ってきた垣根に向かい呆れたように言う

「お前エ自分の持ってきた服をよくみてみろオ

そんなの着たら郷ひろみの再来とか言われるぞきつと」

「え!マジかよ!!俺絶対買おう!」

(コイツ……、わかってたけどオ、やっぱア相当バカだア)

一方通行はレジに持ってきたその服を買おうとする垣根の姿に頭を抑える

「あれどうしたのってミサカはミサカは頭を抑える貴方に訪ねてみたり」

「いや何、馬鹿を見ると起こるただの発作的な症状だ」

「ふーん……」

打ち止めは遠い目で明後日の方向を見ながら答える一方通行に納得したように声を上げる

「……そんな事よりいい加減決まったのかテメェら？」

一方通行が服を選んでいるはやて達二人を見て訊ねるとまだ何かを言い合っている

「はやて!! 絶対にこっちの方がいいよ！」

「なにいつとるんや!!!!」

このパーカーの方がめっちゃくちゃいいに決まってるやろ!!！」

「ありやりやコレは修羅場だねって、ミサカはミサカは貴方に対して励ましの言葉を送ってみたり」

「……、ハア」

一方通行はこの状況に思わず頭を抱えてため息を吐く

それから三時間の後に口論の末、

彼女達が持っていた服を二つとも一方通行に着せてみようという話になり決着がついた

「絶対にわたしの方がカッコイイよ！」

「いやいや私の方が間違いなくカッコイイに決まっとる!!」

「まあまあ……、」

「……………（死ね一方通行）」

——試着室前、

一方通行は二人から選んで貰った服を押し付けられて試着室へと放り込まれたのだった

――ガチャ

「あ、試着終わったみたいだねって、

ミサカはミサカは開くドアの音を聞いて確信してみる」

開く扉からは白い髪の毛に赤い瞳の一方通行……

「どうだ、着たぞオイ……」

その姿に思わずその場にいた全員が固まった

漆黒のパーカーの中には白い英語が書かれているブイネックのTシャツ

下はチェーンがついている灰色のジーンズだ

（いや髪の毛が白いせいかな黒の服がなんか妙に合ってる）

（せやな…、このチョイスも悪くない……

……と言うより）

一方通行の姿に二人は顔を真っ赤にする

（カッコイイ……）

二人を見た一方通行は呆れたようにため息を吐く

考えてみれば元々、男性に対して免疫力が少ない彼女達にとってみれば美男子の部類に入る一方通行の衣服は刺激的だったのかも知れない

「めんどくせエなア…、
この際だ二つとも買う、
いいだろそれでよオ」

「「……うん」」

「ああーあ、魂抜けてんなーコレは」

二人は一方通行の言われるがまま頷きその様子をみた垣根は左右に首を振り言う

その後、選んだ服を購入した一方通行と打ち止め、垣根となのはは、魂の抜けたフェイトとはやてを連れて店から出た

「まあとりあえず買い物は終わりかな、

途中でアイスでもかって帰ろうか」

「お、いいねえ、なのはちゃん」

「あ、俺ア甘エのはパスな」

とりあえず衣服の買い物を終えた五人は次の目的地を決める

「……コーヒーしか飲めないカフェイン中毒者、使えねえな」

「オイ、今アなんか言ったかア？クソメルヘン」

「いやあ、べつつにー…」

一方通行は隣でボソリと呟く垣根に青筋を立て、一方通行に睨まれ

た垣根はわざとらしくシラをきる

——ドカーン!!!!!!!!

と一方通行と垣根が会話を終えた途端の出来事だ

道の端にあった店が突如、なのは達の目の前で爆発する

「な、何や!!」

「え!!!どうしたの?」

その場にいた全員は突然の出来事に思わず声を上げる

そして、その爆発した店から現れる黒いシルエット……

「ンだよ鮭弁ねえのかこの店はよォ!!」

「……………」

「……………」

その場にいた超能力者二人はあまりの馬鹿らしさに言葉が出ない

「ちょっとオ！！麦野！！鮭弁ないからって店吹き飛ばすことないじゃないですか！！」

「……やかましい！！」

アレイスターからこんな訳の分からない理由から、こんな街に来させられた挙げ句

更に鮭弁が食べれないなんて問答無用だろうがああん！！」

「結局……、器物破損って訳よ」

「……………最近、なんか機嫌が悪かったもんね麦野……………」

——そう、この超能力者二人の顔見知り

そして、その様子を見ていた一方通行と垣根は頭痛がする頭を抑えて同時にゆっくりと口を開く

「「悪い…、俺達の連れだ……」」

——波乱万丈の垣根達の休暇はまだ終わらない……。

ていとくんとアイテム（前書き）

——ロリコンとは一方通行と見つけたり——

——by 垣根

ていとくとんとアイテム

——ミッドチルダの街中

一方通行と垣根は爆風と共に現れた四人の少女に近づき話し掛ける

「オイオイ、テメエらこんなところで一体何やってんですかア？」

「……、ん？もしかしてその声は……」

大破した店の前にいる少女達に一方通行が声を掛けると幼げがある

一人の少女がすかさず声の聞こえた方へ振り返る

「……やっぱり！！超師匠じゃないですか！」

「……誰だよオ超師匠ってエ……」

一方通行は駆け寄る少女に対して呆れたように言う

「あーあ、

むぎのんまたこんなに派手に壊しちゃてえ」

垣根は呆れたように怒り狂う麦野に対して言う

「あん？クソ垣根と一方通行じゃないどうしてあんた達が此処にいらんのよ」

機嫌が悪い麦野は近づいて話す垣根に対して睨み付ける

「まてまて、そんなに睨むなよ、

またシワが増えっぞ

ホレさっきコンビニで買った鮭弁やるから落ち着け」

「あら、良く見たらイケメンの垣根に一方通行じゃないの、どうしたの貴方達？」

「現金なア奴……」

変わり身の早い麦野に思わず垣根と一方通行はため息を吐く

「それでエどうしてテメエらいんだ弟子絹旗ア」

「私的には超愛弟子って言って欲しいんですけど超我慢して上げます」

「超我慢って……、便秘気味みてえだな」

絹旗の返答に垣根が呆れたように突っ込みを入れる

「違いますよ！コレだからメルヘン育ちは困ります」

「聞き間違えかあ？

今、メルヘン育ちなんて言わなかったかなクソ餓鬼イ！！」

垣根は絹旗に脅しをかける様に背中から羽根を出して青筋を立てる

「いゃん……、超ケダものが襲って来ます助けて下さい師匠！！」

「オイ、フェイトオ、
コイツウ婦女暴行で連行するぞオ」

一方通行が後ろにいたフェイト達に言うど垣根の羽根がしょんぼりと堕ちそしてなのはに泣きつく

「うわぁん！またロリコンが苛めるよー」

「にやははー…よしよし」

「誰がアロリコンだァ！！」

一方通行は垣根の一言に青筋を立てる

「それで一方通行はこの子はどういう……」

「ああコイツかア？ 只のクソ弟子だ」

訊ねるフェイトに一方通行がそう答えると隣にいた絹旗はムスツとした顔をする

「なんですか！ 師匠！

熱い夜を過ごしておいて私は超愛人じゃないんですか？」

絹旗のその一言にその場にいた全員は固まった

「「……一方通行クウン」」

そして、二人の悪魔が目を輝かせて一方通行に向かい同時に言葉を発する

「うわぁ……………」

きめえ一方通行……

いくらなんでもそれはないわぁ……………」

「……とりあえず私の範囲5メートル近くまで寄らないでね」

「……………」

垣根と麦野は軽蔑したように一方通行に言う

そして、本人は真っ白に固まって硬直したままゆっくりと口を開く

「……絹旗、後でお前屋上な」

「え！超愛の告白！」

何やら色々誤解をしている絹旗を他所に一方通行は話をし始める

「……それでエ、話を戻すけどよオなんでテメエらが此処にいんだア？」

「……ごまかした……」

「結局、逃げたって訳よ」

「よしテメエらア二人も後で屋上来い……」

一方通行は軽蔑した眼差しを向けてくる滝壺とフレンダに青筋を立てる

「……じゃねエ聞けやア！進まねエだろうがア！！オイ！！！」

「デメエじゃ埒があかねえ、

って事で俺が話すからどけモヤシ」

——という訳で結局一方通行に代わりに垣根がアイテムに事情を聞くのであった

「……成る程な、じゃテメエらはあの万年ニートに此処に来させられたって訳だ」

「そうなのよお、あのニートマジムカつくわあ……」

話に納得した垣根は麦野の愚痴を聞いて頷く

「……でどういう事ですか師匠、

一体この人達と超どういう関係か教えて下さい……」

垣根の話を聞いた絹旗は不満そうに一方通行の腕を掴み訪ねる

「私は一方通行の愛人Aです」

「ちなみにウチはBや」

「ちょっとオ待てエ!!、」

「デメエらはいつから俺の愛人だよオコラア!!、」

「一方通行は訳の分からない状況に全くついていけない」

「あの夜の事を忘れたの？」

外で二人っきりの熱く交わしたあの出来事を……（話だけどね）」

「だから誤解をオ招く事オ言うんじゃありません！！」

一方通行は誤解を招くように話すフェイトに突っ込みを入れる

「まあそう言う訳やから、

そこの嬢ちゃんは愛人ではなく弟子やろ？

私達の方が上やな……」

「……テメエはア何勝ち誇った顔してるんですかア！？

馬鹿か！俺の回りには馬鹿しかいねエのかア！！」

「ちなみに俺は天才な！」

「「「テメエが一番馬鹿だよ」」」

名乗り出て馬鹿ではないと公言しだす垣根は皆から一斉に否定され
シュンと落ち込み両手で顔面を覆う

「……私お嫁に行けない」

「大丈夫、テメエは男だ未元物質……」

と何故か麦野に励まされる垣根であつた

「……つう訳だからア誰が愛人だとかア、正直どうでもオ……」

「「一方通行クウン？」」

「……いやなんでもねエ……」

この修羅場に一方通行はため息を吐くことしか出来ない

——ポ^ッンポ^ッン

……と一方通行は肩を叩かれ振り返る

すると、そこには満面の笑みを浮かべている垣根の顔

——そして彼はこう言った

「……今日から君は富士山だ!!」

「……………」

一方通行はあまりの馬鹿らしさに言葉が出ない

(…あー頭いてえ……)

こうして、新しい仲間アイテムを加えていくとくん達の休暇は終了した

ていとうんと宴会芸始まるでえ (前書き)

――我ながらタイトルがひでえ――

――では――

ていといくと宴会芸始まるでえ

――所変わって管理局内

アイテムを引き連れて帰ってきた垣根とその他諸々はシグナム達にいる病室にて自己紹介を行っていた

「そう言う訳だから私はコイツ等のリーダーで麦野沈利っていうのヨロシクね」

「うわぁ…年増きめエ」

一方通行の一言に麦野は一瞬顔をひきつらせるがなんとか耐える

「……私は滝壺理后……」

「フレンジって訳よ」

「絹旗最愛です、よろしくお願いします」

そして、麦野に続いて三人はそれぞれ頭を下げて自己紹介を済ます

「ありゃ珍しく礼儀正しい、

どうした全員頭でも打ったか？」

垣根は首を傾げ自己紹介をするアイテムメンバーを茶化す様に言う

「垣根！！超勘違いしないで下さいよ！！」

：私は師匠をこんないい年して魔法少女を名乗る年増女達には渡すつもりはありません！！」

「と、年増！！」

絹旗の言葉にはやてとフェイトは思わず固まる

「…あーまあ確かに少女時代は過ぎてんな」

「「……………」」

絹旗の言葉に納得し頷く垣根に最早二人は真っ白になった

「……まあそんなに気にすんなよオはたから見ればテメエらは十分美人だア、自身持てエ」

（あらこいつ、意外に良いフォローが上手いのね）

麦野はフェイト達を励ます様に声を掛ける意外な一方通行の行動に
思わず関心する

「「一方通行ー!!」」

「…チツ（…師匠、余計なフォローを…）」

一方通行の言葉に目を輝かせて明るい表情を取り戻す二人に絹旗は
舌打ちをする

「また知らない顔が増えたねティアナ」

「……私はこのハチャメチャな人達が何かとんでも無いことをやらかさないか不安だわ」

病室で一方通行達の様子を見て呟くスバルにティアナは片手で頭を抑えて答える

「確かになあ私も不安だ……垣根は面白いけどな……ププ」

「まだ思い出したのかヴィータ」

隣で含み笑いをするヴィータに対してシグナムは呆れたように言う

「まあそうゆう訳だからヨロシクね」

「こちらこそよろしくね、麦野ちゃん」

そう言うとき麦野となのはは握手を交わし笑顔で応える

（何か知らないけどこの二人……なんか同じ危ない匂いがする……
…）

と微笑ましい光景な筈なのだが、その場にいた全員は嫌な予感しか
しなかった

「さてと、それじゃ話がまとまった所で…、
はやて、例のアレだ」

「ラジャー!!」

一段落ついた所で垣根ははやてに向かい何やら指示を出して互いに
頷いた

——垣根は大きく手を広げ何故か片手にはマイク

——そして

「……レディース and ジェントルマン!!」

テメエら良く聞けえー!! 第一回、カラオケ王者決定戦の始まりじやあああ!!!!」

垣根はその一言と共に巨大なカラオケセットを目の前に出現させた

「「……………」」

突然の出来事にその場にいたはやて以外全員は開いたまま呆然とする

「……か、カラオケ王者決定戦?」

「そうだ、テメエらの親睦を深めるべく俺とはやてが勝手に企画したんだぜ」

「またア訳のわかんねエ事しやがってエ」

垣根の言葉に目を丸くするフェイト、さらに隣にいた一方通行も思わず頭を抑えて呆れる

「ふうーん一方通行、テメエさてはカラオケで俺に負けるのが怖いのか？」

「……………ンだとオ」

呆れた様子だった一方通行はその垣根の一言にピクツと反応し青筋を立てる

「……………うわぁ第一位がまさかこんなチキンだとは……………」

「……………」

一方通行は眉間にシワを寄せて段々と機嫌が悪くなっていくのが全員にわかる

「……………いいぜえ垣根エ、その話乗ったア」

一方通行は首の骨をゴキリと鳴らす

（（いや…、なんか殺る気だよあの人））

全員はそんな一方通行の様子を見て思わず苦笑いを浮かべる

「あ、あとテメエらは強制的に参加な、拒否権ねえから、

……したらぶっ飛ばすけど」

「「えー!!!」」

という訳で垣根が用意したカラオケで全員は大会をするハメになったのであった

「それじゃ一番最初は誰がいくのかな？」

――管理局内病室

――では現在の状況について説明しよう

常識に考えて静かにしなければ成らない筈だろう病室。

しかし、今、なのは達は垣根の用意したカラオケセットを全員で囲んでいるというところでもなく意味不明な状況だ

（（（……どうしてこうなった）））

その場にいた全員は内心とてつもなくそう思っているがあえて声には出さない

「…………大丈夫だトップバッターは決まっている」

垣根がそう言うと言をパチンツと鳴らすと同時に曲が流れ始めて病室の扉から人影が写り、そこにライトが照らし出される

「あ……、アレは……」

「盛り上がってるかテメェらー！！！！！！」

通称管理局の殺人料理の使いと言われている女性……、

「「「……シャル！！！！」」」

——……そう、あのシャルであつた…

「行くぞ野郎共——！！」

「「「……………」」」

何故かやたらとテンションが高いシャルの登場にその場にいた全

員は啞然とする

こうして、垣根帝督主催のカラオケ王者決定戦の火蓋がきって落とされるのだった――――

ていどくんとライヴ（前書き）

——何だろぅねコレ

——では

ていといくとライブ

――管理局通路

とそこではとある二人の人物が会話を交わして歩いていた

「……最近、仕事が増えて嫌になるわね」

「……大変ですねギンガさん」

スバルの姉こと、ギンガ・ナカジマはため息を吐き不満を漏らし、

それを聞いている隣にいた男性局員が苦笑いを浮かべる

「……まあそうね何だかんだで昨日は徹夜だったし」

ギンガは肩を落としてさっきよりも深いため息を吐き疲れた表情を見せる

「……でもこうやってがんばって早く仕事を片付けてスバルの見舞いに来れる時間を作れて良かったわ」

「…目の下、凄い隈ですよ」

とギンガと話していた局員はしばらく歩いた後に扉の前で足を止める

「……っと此処ですねじゃ僕は仕事があるのでこれで」

「ごめんなさいね、道案内ご苦労様」

そう言う局員はギンガに頭を下げてその場から立ち去って行く

（まさか、また局内が新しくなってるなんて思って無かったなあ）

ギンガは記憶を詮索し前に来た管理局の中を思い浮かべ心の中で呟く

実の話、先日起こったカキネ・ランチャー事件の被害で管理局の一部が吹き飛んでしまった為、

仕方なく修復を余儀なくされた管理局は中身を丸々改築したという訳である

そんな出来事があったとは知らないギンガは、早速道に迷ってしまい知り合いの管理局員に案内して貰ったという経緯なのだ

「あ、ギンガさん何やってるんですか？」

ギンガが丁度考え込んでいた時だった

唐突に後ろから声が聞こえる

「あらシャーリーじゃない奇遇ね」

そうギンガに声を掛けたのはデバイス開発者のシャーリーだった

「貴女こそ何やってるの？」

「いや、丁度新しいデバイス出来たので報告しようかと、

ギンガさんは手元にある花束があるようですし、誰かのお見舞いで
すか？」

シャーリーが首を傾げ訪ねるとギンガは笑顔で口を開く

「まあ、一応そんなところかな」

「そうですか、じゃあ一緒に入りましょ」

シャーリーはそう言うと言の前の扉に手を掛けてゆっくりと開く……

——そして、次の瞬間……

——彼女らの視界の中には……

「ウルトラソウルウ!!」

「「「イエーイ!!!!!!」」」

カラオケセットで合図と共に声を上げて盛り上がっている六課の面々と一方通行達の姿

……そして、マイクを上に掲げて声を上げる垣根の姿であった

「「……………」」

二人は目の前の出来事に真っ白になり、

——そして、

「「間違えました」」

咄嗟に二人は同時に頭を下げて扉から出ていく

「まてまてまて！！間違えじゃないから二人とも帰ったらあかん！」

歌い終わった垣根のマイクを使いはやては出ていこうとした二人を呼び止めるのだった

「たく早とちりしやがって、

デメエらふざけんな

鼻の穴に良い具合に丸めたティッシュ突っ込むぞコラ」

——あの後、

はやてから呼び止められた二人は正座をさせられ何故か説教を食らっていた

「ねえ、B、Z舐めてんの？」

デメエらはロックをナメてんのかオイ、

三秒で答えろ」

「誰だよお前エ」

マイクを持って説教を繰り広げる垣根に一方通行は呆れた表情で言う

(…何この状況)

そして、正座をさせられている二人は全く状況が理解できない

「垣根、許してあげて、

いきなりの出来事に二人とも気が動転してたんだよきつと」

隣にいたなのは垣根の肩に手を掛けてとりあえず説得する

「…たく仕方ねえなあ」

垣根は頭を掻いて渋々なのは説得に応じる

「……テメエら、今日は無礼講だ、島根県に免じて許してやるよ」

「超意味がわかりません……」

垣根の訳が分からない発言に思わず絹旗が突っ込む

「てゅーか誰？この人」

「……私のお姉ちゃんです」

麦野が首を傾げてギンガに訪ねると横にいたスバルが答える

「……びじんだね……」

「確かにねえー美人姉妹って訳よ」

すると、垣根から正座させられているギンガを見て滝壺とフレンダは関心の言葉を口に出す

「よっしゃ、途中で中断しちゃったが次行くぞ次」

「なんかあんたやりたい放題ね……」

麦野はあまりにも切り替えが早い垣根に呆れた表情で言う

「は？切り替え早くねえとカラオケはやってらんねえよ」

それに対して垣根は当然だと言わんばかりに言い返す

「んじゃ俺アいくぜエ」

「おうイケイケー」

一方通行はマイクを持ち出し、それに対して垣根がどこから持ち出したのかタンバリンを高く掲げる

「……EX○LEとはまた超メジャーですね師匠」

「オイ！！……テメェらトレインやるぞ！！俺に続けー！！」

垣根の合図と共に病室にいた数名が一行に並び出す

先頭に一方通行二番に垣根、そして三番四番五番にはやて、フェイト、なのはが順に並んでいる

勿論、シグナムやティアナ達は怪我人なので加わっていない

「なんで！なのはさん達が加わってるんですか？」

「……まあ色々と事情があるんや、ソコはきかんどいてや」

「……………にやはは」

「……、ううもう…」

垣根の後ろに並ぶなのは達にティアナは訪ねるが、

三人は覇気がなく返答し、フェイトに限っては何故か涙を流して項垂れつつ並んでいた

「デメエら行くぞォ！」

一方通行の号令と共に一列に並んだトレインが動き出し音楽と共に五人は上体をグルグルと回している

「よっしゃ手え回せ」

更に上体の回転に加えて五人の手まで回転しだした

「……、ヤバいです超choo-chooトレオン…」

「……いや流石にここまでやるとは………」

「名付けてカキザエルってか」

シャルの一言に思わず、オォー と関心の声を上げるティアナ達

そして、歌が始まると同時に病室の扉から謎の男達が現れる

「え！……！！……」

「な、何！？」

急に現れた人達に思わず声を上げるティアナとスバル

「え！……ちよっ！！」

「な、なんや！！」

そして、トレインをしていたのは達は退けられて一方通行と垣根の横にその五人の男達は並ぶ

（なんだア聞いてねえぞオ）

そして、その場の状況にマイクを持っていた一方通行もついていけない

そして、ふと垣根の方を見るとマイクを掴んでいた

「いくぜテメェら！……！！」

（こ、こいつの仕業かよ……！！！！）

……チクショウヤケだ……！！）

音楽と共に一方通行と垣根は歌を歌い出し、男達は一斉に踊り出す

「あ、あれって……、」

「……、本物ねダンサー」

「……カッコイイ……」

多様なダンスに思わず六課と麦野達は見とれる。

気づけば病室にはギャラリーが押し寄せていた

「……………ここって何処？ スバル」

「……………私に聞かないでよお」

最早、病室ですらないこの場所にギンガは訪ねるがいつの間にか異様に広くなっている病室にスバルは返答しようがない

「fun fun we hit step step—!!」

会場（病室）はもはやライブ会場と化し、辺りは熱狂している。

そんな中、病室に最初にいた六課の全員は何故か一番前の最前線にいる

「ほんとやりたい放題や……」

一人呟くはやて、しかし、隣にいるのは達やシグナム達は手を上げて盛り上がっている

(な、なんかみんな巻き込まれてるし)

(…………ダンスって面白い…………)、

この異常な光景にティアナはひたすら苦笑い、

そして滝壺は一方通行達の様子を見て楽しそうに笑っていた

「肩を抱き合えば——」

会場は更にヒートアップ、

気づけば歌っている一方通行もノリノリである

——そしてなのは達は……

「——キャーキャー!!……」

シグナム達と共に盛り上がり歌を歌っている一方通行達に手を上げて振る

(……、でも)

盛り上がる光景を見ていたはやてはゆっくりと目を瞑る

（なんかえらい楽しそうやからええか、もう）

と最終的に一方通行と垣根の姿を見て微笑むのだった

「俺にイ常々識は通用しねえー♪」

「なんでやねん!」

こうしてカラオケ王者決定戦？は幕を下ろし、

――また後に、この出来事はカキザエル事件と呼ばれ、

再びミッドチルダに反響を及ぼす事になったのだった

垣根と楽しい訓練（前書き）

——いや、なかなかハチャメチャになってしまいました申し訳ない

——では

垣根と楽しい訓練

―――数ヶ月後

カキザエル事件から数ヶ月たった後にティアナ達は無事に完治し、

一方通行達と共に再び日々の厳しい訓練に励んで……

「……はーいアウトーお前の負けね馬鹿通行」

「垣根エ…、殺すナリイ」

——いなかった

「アンタ達またやってんのババ抜き、」

——管理局のとある一室、

トランプを両手に持っている二人の様子に麦野は呆れて言う

「俺の5連勝……君イいい加減、俺様に最強の名前を返上したまえよ」

「……ケツ、ほざいてんじゃねえよ三下ア!! もう一戦だコラア!
」

垣根のひたすらムカつく言動に一方通行はトランプを机に叩きつけて再戦を申し込む

すると、席に座っていたティアナが急に立ち上がり垣根に話し掛ける

「垣根教官、コレやり方わかんないですけどー」

「あーどれだ見せてみ」

垣根はプリントを持って来たティアナに適切に解き方を教える

「これは演算式を――」

そう垣根は彼女達FW陣の訓練は行わず、

代わりに莫大な量の数学式問題や様々な演算方を教えていたのだった

「ううゝ頭が痛いよオ」

「頑張りましたようスバルさん」

問題が分らず頭を抱えて涙目のスバルにエリオは応援の言葉を送る

――数時間前

フリーフィングルームの中で垣根はFW陣集めて話をしていた

「今日から君達にはある特別な訓練を受けてもらう」

「特別な訓練」

F
W陣は全員首を傾げ垣根に聞き返す

「そうだテメエらが使っている……、えーとアレ？なんだっけ」

垣根は早速何かを忘れ言葉に詰まり首を捻る

「……デバイスです」

「ああ、そうそうデバイスなデバイス」

垣根はティアナの言葉に手をポンと叩き話を続ける

「えーと、この世界において魔法はある法則のもとで科学と近いものの、

いや科学のひとつと言っても過言ではねえよなテメェら」

「ま、まあそうですね」

垣根の言葉に頷きティアナは返答をする

「じゃ、簡単だ……この魔法を科学兵器に変換するデバイスというやつ

理解、演算、それを行うことでテメエらの戦闘力をUPさせるって訳だ」

「でもそんな事して具体的にどんな風に能力がUPするんですか？」

315

ティアナは垣根の説明に具体的な説明を求める

「まあ…、簡単に言えば、このデバイスの演算や理解によって

テメエらが使うカードリッジとやらが1つで十個分ぐらいの

いや、下手をすりゃ百個分の威力が弾き出せるっつうこったな」

「……………」

垣根の説明にその場にいたFW陣は言葉が出ない一人を除いて

「え？つまりどういう事ティアナ？」

（ひっ…、1つで…！百個…！なんてデタラメな…！）

イマイチ理解できてないスバルは真っ白になっているティアナの肩

を揺らすが反応はない

「あー…、また簡単に言うど、

なのはが使うスターライトなんちゃらとかいう必殺技が普通の攻撃で出せるてな感じ？」

「…あー…ってええ!!」

スバルは垣根の説明によりやく事の重大さを理解する

「いやいやいや!! そんな事になったらとんでもなくぶっ飛んでますよ色々と!!」

「あーうつせうつせ、

いやもうめんどくせえから、なんか気にすんな

俺に常識は通用しねえ」

垣根は結局この一言でその場にいたFW陣を制する

（それって私達がいわゆる歩く質量兵器（垣根&mp;一方通行）
みたいになっちゃうて事だよな）

もう、話を聞いたティアナの頭の中は大混乱しエリオとキャロに限
っては未だに真っ白だ

「そう言えばなんで一方通行と垣根教官はロストギアに認定されないんですか」

ティアナは今更ながら訪ねると何かを思い出した様に垣根はオオと声を上げる

「あー思い出したそういや、先日

最高評議会とかいう奴等に俺が色々と手回しして全員片付けて、今は俺が最高評議会議長兼お前らの教官です

そこんところよろしくね、

てゆーかテメェら拍手しろや」

「「……………」」

——まさかの一言に全員は最早沈黙するしか無かった

「まあ、俺の仕事は適当にクロノとかいうやつとセロリに全部押し付けたけどな」

「……………」

もう訳が分からないと言いたげなFW陣はあえて口に出さない事にした

「……えーと、ああそうだった、

てな訳だから今日中にこれ解けよ」

そう言うとは垣根はどっさりと大量の山積みになっているプリントを
FW陣の目の前に置く

「ちなみに出来なかったら管理局全員の前で一発芸な、全員が笑う
まで」

(((もう…いや…)))

そして、それを見て聞いた瞬間、全員の目から大量の涙がひたすら
流れるのだった

――所変わってブリーフィングルーム

「それで、垣根と師匠はいつの間にか管理局の一番偉い人になった訳ですか……、あドロー2です」

「……驚きが隠せないって訳よ、ほいドロー2」

「なんか色々と管理局内のシステム弄って最高評議会って奴等の弱

味を調べ尽くして二人で脅したようだぜ、ホレ、ドロ―2」

「……………、（……………新手の苛めかな…）」

絹旗達とヴィータが出したドロ―2を一身に受けてシュンと落ち込む滝壺

「デタラメなやつだとは思っていたがまさかここまでとは」

「確かになあー」

シグナムの言葉を肯定するようにウノをしていたヴィータは頷く

「アレ？　そういえば今日は休みなんですかシグナムにヴィータ」

ブリーフィングルームにいる二人に絹旗は首を傾げて訪ねる

「午前中は特にないな午後からはヴィータも私も仕事がある」

「えーまじかよー…」

シグナムの言葉を聞いたヴィータはあからさまに嫌そうな顔を見せる

「そういえばなのはやフェイト達はどこに行ったんですか？」

「彼女達は朝早くから別件の任務だ最近は色々忙しいらしい」

「へえ、大変って訳ねアンタらも」

フレンダもシグナムの言葉に思わず関心して言う

「おっと、もうこんな時間か、それじゃ私はこれで失礼する」

そう言うときグナムはブリーフィングルームの扉から開いて出ていった

――

――所変わってとある一室

「はい、挙がりいざまあ
W
W
W
W
W
W
」

「チクシヨウまたかア!!!!!!」

一方通行と垣根は未だにババ抜きを繰り広げるのであった

(特別) 垣根と聖夜(前書き)

——シリアスになってしまったア

——何コレ

（特別）垣根と聖夜

——クリスマス

寒い冬に行われる特大なイベント、

そう、この一大イベントに奴が動かない筈が無かった

「デメエらあ！！…クリスマスパーティーするぞコラ！！」

「「え! ! : : : :」」

その場にいた全員は垣根の一言に哑然として声が出ない

「……クリスマスパーティーなんてエまた急だなアオイ」

「……そういえば忘れてましたもうすぐクリスマスでしたね」

一方通行に続いてティアナもハッ　　と思いつ出した様に垣根に言う

「そうだ！！…つう訳だからテメェら全力で用意するぞォ！！！」

（やけに垣根のテンションが高いって訳よ）

フレンダは呆れたようにため息を吐く

「……、んじゃ今から大体半日で用意してもらおうからよろしくな」

垣根はそう言うのと羽根を広げて楽しそうに何処かへと飛んでいった
しまった

――所変わって、ミッドチルダの街中、

羽根を広げて飛び去った垣根は様々なところを歩き回って両手には大量のプレゼントを抱え込んでいた

「重……！！……とんでもなく重い！！」

垣根はいったんプレゼントを全て下ろして未元物質で包み込んだ

「よし、こうすれば少し軽い筈だ」

そして、垣根は再び羽根を広げて飛び上がる

「……あいつらの喜ぶ顔が目に見え……くくく」

笑みを浮かべて羽根を広げて飛び管理局へと急ぐ

「どうや？そっちは」

「……、うん大丈夫みたい」

「……それにしてもデカイねえ」

なのは、フェイトとはやては幾つもある巨大なクリスマスツリーの飾り付け

「シグナムさん超頼みます」

「……ふっ任せろ!!」

「それにしても重いなあコレ」

ヴィータ、シグナムと絹旗は沢山ある重いクリスマスツリーの運搬、

「麦野、頼むわア」

「任せなさい、一方通行」

「なかなか製造が難しいって訳よ」

「デバイスを作るのとはやはり違いますねえ」

そして、シャーリー、フレンダ、麦野と一方通行は打ち上げる為の
手作り花火の調合、調達。

「あーとそこはこうやるんですよ滝壺さん」

「……あ、ホントだ」

「流石はエリオだね」

「うん、意外に貴方の手の器用さにミサカはミサカは驚愕してみたり」

打ち止め、エリオ、キャロ、滝壺は飾り付けのわっかを製造

「……ただいまあーもう寒かったあー」

「ふう、これくらいで足りるかな」

「大丈夫よ……、多分」

シャル、スバル、ティアナは食材の買い出しから帰ってくる

——そう、垣根から言われた通り、

それぞれがX'masパーティーを用意する為に役割を分担して率先して取り組んでいたのだ

「ヤッホー!!…差し入れにきたよー」

すると、その後ろから巨大な袋を持ってスバルの姉ギンガが現れる

「……、うわぁ!!…、驚かさないでよ、お姉ちゃん」

「……ははは、ゴメンゴメン」

ギンガはそう言うとき大きな袋を開きつつ嬉しそうに笑う

「ほい、ケーキよ大変だったんだからね、
これだけ大きな買うの」

「うわぁ、ホントだデカイですね」

取り出されたケーキの箱を見てティアナは思わず関心した様に言う

——と、その時だった

「オーイ帰ったぞォ!!…」

ティアナ達の後ろからとてつもなく巨大な袋を持って垣根が帰って来た

「うわ!!…垣根教官凄いデカイですね!!それ」

「そうなんだよ、だから運ぶの手伝って、お前等」

垣根のその一言にスバル、ティアナが協力して袋を持って運ぶ

「こんなに何買ったんですか垣根教官……」

「……ふふふ、それは見てのお楽しみってな」

そして、首を傾げているスバル達に垣根は不敵な笑みを浮かべるの
だった

――それから約数時間後

辺りはすっかり暗くなり丁度全ての作業が終了した

「……それでは皆さん」

「「Merry Xmas!!!」」

その場にいた全員は垣根の号令と共にクラッカーを鳴らして声を上げる

「いやー良かった良かった、無事に用意出来て」

「たくメルヘンがア……、

こういうのだけはアいつちよ前にしたがりがあってエ」

「ンだとセロリ!!」

安堵の言葉を漏らすはやてに、一方通行は横目で垣根に呆れたように言うと、

それに憤慨するように垣根が言う

そして、スバルとギンガは早速、

テーブルに並べてある食べ物それぞれ手に取り始める

「うまい！！！！・・・コレ！！・・・誰が作ったの！！」

「ホントだ美味しい！！」

暴食姉妹は口の中へ食事を含みつつ、訊ねる

「あァーそれはア俺だァ」

すると、垣根の隣にいた一方通行が手を挙げて答える

「「……、えー!!!!!!」」

「なんだアそのあり得ないみたいな反応ア」

これには流石に全員驚きの声を上げる

「……まあ確かに悪人面に料理のなんて組み合わせはちょっとなあ」

「オイお前エ、ソリで轢き殺してやろうかア？」

馬鹿にしたような態度の垣根に対し一方通行は青筋を立てて拳を鳴らす

「んじゃ、そろそろプレゼントタイム」

垣根はそう言うと言程の巨大な袋を開きつつ微笑み言う

「……えー！超マジですか」

「はい超マジです」

垣根はそう言っていると袋からプレゼントを持ち出す

「ほら受け取れい！！！！」

そして、ばら蒔く様に次々とプレゼントを投げる

「うわ！！……」

「ちょっと!!...!」

プレゼントは次々となのは達や一方通行達の所へと飛んでゆく

「プレゼントに翼が生えたって訳よ!!」

「わーってミサカはミサカは喜びを体で表現してみる」

「すー...」

幻想的にクリスマスツリーの回りを翼が生えたプレゼント達が飛び回りそして各自の所へと飛んでゆく

「あー！！…私のはマフラーだー！！」

「私のは手袋だった」

ティアナとスバルは飛んできた自分自身のプレゼントを互いに言い合う

「私のは鯉の抱き枕だった、

有り難うー垣根」

「……………私のは兎のマグカップか……………」

麦野と滝壺は嬉しそうにプレゼントを見て喜ぶ

「……………アレ？」

「どうしたの？なのは」

急に辺りを見渡し始めるなのはにフェイトは首を傾げて訊ねる

「……垣根と一方通行君がいつの間にか居ない」

すると、中央にあるクリスマスツリーに何か紙のようなものが張り付けてある

「しばらくして戻ってくるだつて」

「何、考えてるのかしらね、あの人達」

「まあどうせ、また何かやってるんじゃないの構わないでご飯でも食べてましょ」

麦野がそう言うとその場にいた全員は頷き食事を手にとって食べ始めていた

――

――冬の寒い夜

「……………」

夜のミッドチルダに雪が降り注ぎクリスマスを幻想的に引き立てる

「……………」

そこに、一枚の写真を持ち出し、花束を片手に海を眺めて羽根を広げているひとつの人影……

「…悪いな遅くなって」

悲し気な表情を浮かべる茶髪の青年、

「……お前の好きな物が思い付かなくて、

こんな物しか用意する事しか出来なかったけど……」

羽根を広げる青年はそれを仕舞い、写真を取り出す

「……今年はホワイトクリスマスだな」

青年はそう言うのとそつと砂浜に花束を添えて写真に微笑む

『帝督、クリスマスの夜は海に行きたいな』

『……ああ？、寒いだろうが馬鹿かお前！？』

『馬鹿……こうゆうのは雰囲気大切なのよ』

——それは昔の記憶

アイツは俺に笑ってそう言った

『……ホワイトクリスマスに成ると良いね』

『ああ…、そうだな』

青年は砂浜においた花束を哀しい瞳で見つめる

『……私はねえバラが好きなの赤いバラ』

『バラだあ？……餓鬼が調子のとてんじゃねえよ』

赤いその花束は寒い雪が降る冬の砂浜で風に揺れる

「……なあ聞いてくれよ

あいつ等、俺のプレゼントにめっちゃくちゃ喜んでたんだぜ、
たく餓鬼かってなあ？」

垣根の声は虚しく冬の寒い風に消えてゆく

「……ごめんな、今年は行けなくてよ……」

青年は顔を伏せて申し訳なさそうに口を開き言う

「……俺ってさ、

不器用だからみんなを振り回してばかりで馬鹿だよな」

その青年の背中はいつも大きな背中とは違っていて、とても小さかった

——ビュウと青年の頬を一筋の風が吹き抜ける

「そんなことないよ垣根……」

青年は聞き覚えのある声に反応し後ろへゆっくりと振り返る

「……お前何で……」

青年、いや垣根の目線の先には見覚えのある顔

「……なのは……」

一筋の涙が振り返った垣根の右頬を伝っている

それに気付いた垣根は素早くそれを拭き取った

「……あーやべ、情けねえところ、見せちまったな」

そして、垣根は素早くなのはに背を向けたまま謝る

「……垣根……辛いの？」

「は？なに言ってるんだ、シなこと……」

すると、なのはは垣根の背中に手を回す

「……離せよ……」

「……………」

なのは黙って背中に抱きついたまま答えようもしない

「……大丈夫だから」

なのはから発せられたのはその一言、

「皆、垣根の味方だからね」

「……、そうか」

垣根はそう言っていると自分自身マフラーを取り外し、

後ろにいたなのはへと巻つける

「……帰るか

これは、俺からのクリスマスプレゼントだ」

「……有り難う」

垣根はそして、白い羽根を広げる

「悪いな寒いけど我慢してくれよ」

「うん……」

垣根はそう言うとなのはを近くへ抱き寄せる

「…ふえー!!」
／／
／／
「」

なのはは顔を真っ赤にしてそれを見て垣根は笑っている

——そして、哀しい瞳で海を見つめてこう言った

「じあな……」

——冬の夜に消えてゆくその声

『またね、帝督』

そうして羽根を広げた青年は少女と共に雪が降る冬の暗く寒い空へと消えてゆく

フエイトは白い髪の毛をしたあの男を探して街中を走り回っていた

（何処にいったんだろう一方通行……）

しばらくして、花束を持っている白い頭の少年が目の前を通り過ぎる

（あ、アレは……！！）

そして、フエイトはその人影の後をついていく

白い髪 of 毛の少年は哀しい瞳で花束とオルゴールを持ったまま夜の公園に姿を現していた

「…あー…そこに隠れてる奴ア出てきなア…」

青年はため息を吐き後ろへ振り返って言葉を発する

そして、その声と共に物陰から姿を現す金髪の少女

「気づいてたんだ…」

「……あたりまえだア、俺を誰だと思ってやがる」

白髪青年は微笑み物陰から現れた金髪の少女に言う

「……、ソレは？」

「……ん？」

白髪青年は訊ねる金髪の少女に花束を見せる

「……ガーベラって花だ」

「……ガーベラ?…」

金髪の少女は首を傾げて花束を持っている白髪青年に訪ねる

「……今年のは……あいつ等には供えなかったからな……」

そう言うと手元からガーベラを公園の中央に置いてその隣にオルゴールを添える

「……………ここって確か……………私が貴方達に最初に会った……………」

白髪青年は黙って頷き少女に対してゆっくりと口を開く

「……………そうだな……………」

青年の背中には雪が降り注ぎ積もりつつあった

「……一万人の命を奪ったア俺に出来るのはこれくらいしかないかなア……」

背中に積もった雪を取り払い青年は立ち上がる

「……わらえるよなア……俺みたいな悪人が反省なんてよオ……」

……ガーベラの花言葉知ってるか？希望だぜエ？……」

青年は拳を握り締めて悔しそうに歯を食い縛る

話を聞いている彼女は彼の背負っている罪の重さを……改めて感じさせられた

「……貴方は本当に優しい人なんだね」

——そして少女の目からは溢れる涙

「……そんなんじゃないよオ……」

青年は一言そう言うと少女に近づいてポンと肩を叩く

「……帰るぞ」

「希望ならあるよ」

——青年が肩を叩いた金髪の少女からの一言、

そして、少女は話を続ける

「希望はあるよ貴方にも彼女たちにも……」

——少女は微笑み罪を背負う青年の頭を抱き寄せた

「……そうかよ」

青年は微笑み抱き寄せられた頭をフェイトに預ける

——オルゴールの音色——

クリスマスの夜に鳴り響く音色がミッドチルダの夜に響き渡る

「……、コレは……?」

切なくなる音、哀しい音色……

少女は鳴り響くオルゴールの音色を抱き寄せた青年に訊ねる

「……戦場のメリークリスマス」

「……え！？」

青年は微笑み少女の言葉に答える

「……この曲の名前だア……」

降り積もる雪の中、様々な思い出が交差しひとつの曲を奏でるクリスマス。

「……行くかア 餓鬼共が待ってるからなア……」

「そうだね」

彼等の哀しい瞳には辛い現実がのしかかる……

「垣根…何か聞こえるね」

「ああ…、ありあ、

オルゴールだな……」

今夜は深い雪の積もるクリスマス、

「……メリークリスマス……てか、」

「メリークリスマス、垣根」

静かなる聖夜はゆっくりと過ぎ、綺麗な幻想は跡形もなく消えてゆくのだった

垣根と訓練生（前書き）

――今回はちょっと短いかも

――では

垣根と訓練生

——訓練場、

「まだまだまだあ……!!」

「無駄無駄無駄無駄ア!!」

午後に入り、垣根と一方通行は訓練場にて何故か壮絶な戦い（ただの喧嘩）をティアナ達に見せつけていた

「ふざけんなアテメエ!!!!!!」

未元物質でババ抜きのカード偽造してごまかしやがって!!!!!!

ぶっ殺してやらア!!!!!!」

「黙れセロリ!!!!!!カフェイン摂りすぎるから頭が回らなかったデ
メエが悪イだろーがばあか!!!!!!」

そう言うとは根は一方通行のベクトル攻撃をファサガードを使い防ぐ

「クソツタレ!!!!邪魔エなその羽根!!!!」

もぎちぎってやるかオイ!!!!!!」

「無理無理、諦めろ白モヤシ」

垣根は相変わらず余裕な表情を浮かべて一方通行に嬉しそうに言う
と向かってくる攻撃をことごとく羽根でなぎ払う

「……それじゃ、とりあえず、

暴れているあの人達の事はひとまず放って置いて今から訓練を始め
ます」

「」「はい!」「」

垣根と一方通行をほったらかしにするように促すのはに全員元氣
良く頷く

そして、彼女の指導の元、ティアナ達はようやく訓練らしい訓練を
し始めるのであった

「あいつ等も懲りないわねえ」

「良いんじゃないですかやらして置けば」

訓練場の様子を見てため息を吐く麦野に絹旗は呆れたように言う

「……最近あの人が垣根に毒されてきてるかなってミサカはミサカは思ってみたり」

「…………あれ？打ち止めちゃんもいたんだね……………」

そう言う隣にいる打ち止めの頭を撫でる滝壺

「……それにしてもあの子達確かに動きも攻撃力もUPしてるわね」

「……垣根の訓練の賜物かあ、なんやかんやで大したものやなあ」

「……でも当の本人達はあそこで下らない喧嘩をしてるって訳よ」

それを聞いていたその場にいる全員はハアとため息を吐き肩を落とす

「しかし、流石は垣根だなあの猛攻撃をことごとく撃ち落としていく」

「……シグナムは垣根の事が好きやからなあ」

はやてが悪戯な笑みを浮かべてそう言う、シグナムは顔を真っ赤にする

「あ、主、違いますよ!!…垣根の事は別に……／／／」

「顔が超真っ赤ですよシグナム」

否定の言葉を遮る様に絹旗がシグナムへ止めをさす

「…………ぐ／／／」

「……まあ確かに、アイツカツコイイものね」

麦野も羽根を広げて楽しそうに笑う垣根を見詰め、ふと微笑む

「アレレ？、もしかして麦野ー？」

「ち、違うわよあいつとはただの腐れ縁みたいなもんだから」

麦野の発言に対してフレンダは悪戯に言うが否定する当の本人は顔が真っ赤である

「……垣根も罪な男だね……」

「そうだなあ、でも、私は垣根の事は好きだぜ!!」

すると、話を聞いていたヴィータは堂々とその場にいた全員に宣言する

「「えー!!!!!!」」

(こ、これほどライバルが多いとは、おのれ垣根!!!…)

「フ、フラグメイカーに常識は通用しないって訳よ」

苦笑いを浮かべてるフレндаとその他全員は垣根のフラグ体質に驚愕するしか無かった

――――

「ハアアア…!!」

ティアナの掛け声と共に放たれるクロスミラージュ

それをスレスレでかわすのはをスバルが追撃する

「……ハア！！」

「……くっ！！」

なのはは攻撃を防ぎ上空に逃げる様に飛ぶ

（この子達、前より確実にレベルアップしてる）

なのはは隣で一方通行と暴れている垣根の方へ視線をやる

（これは垣根のお陰かもね……、

……だけど）

なのははティアナ達からの攻撃を次々と避け、

尚且つ着実に彼女らの体力を奪いダメージを与えていた

「……動きが単純！！」

「え! !」

「うそ! !」

——次の瞬間、

ド—カン! !、という爆発音と共にティアナとスバルは吹き飛ばされる

「……ぐあ! !」

「きゃあ!!…」

もはや、体力を使い果たした二人はなのはから受けたこの一撃で模擬戦が終了した

――

「はい正座、テメエら何やってんの全く」

――とある部屋の一角

垣根はティアナ達を全員正座させてその上から仏像を乗っけていた

「……罰として今から精神統一の修行じゃ

身体能力や攻撃力が上がっても動きが単純ならやられても当然ナリ」

（ナリってなにさ）

垣根から正座をさせられている二人はズーン、と落ち込みひたすら膝に置いてある仏像に耐える

「……お母さんはね、お母さんは貴方達の事を思って………うう」

「思っても無いことをしないでください」

「ンだよ、空気読めよKYが、」

と垣根の一言にカチンと青筋を立てるティアナ

「あ、ムカついた、

お前仏像追加ね」

「うーごおー!!」

（お、鬼だ）

そう言うのと更にティアナに仏像を追加する垣根を見てその場にいた全員が青ざめる

「足が痛いよー…」

「まあ…、なんだ頑張れスバル」

足が悲鳴を上げて嘆くスバルにシグナムが視線を反らして励ましの言葉を送る

「え？ シグナム、え？ お前やらないの、やれよ、お前騎士だろ」

「い、いや私は……」

(ぎゃー！！！！！しまったァ！！)

と突然の垣根の一言に青ざめるシグナム

「やりましょうよー、シグナムさあん」

そして、死者達（ティアナ達）からの誘いがシグナムを引きずり込む……

「や、止めろ、手を離せ

こっちに来るな垣根ー！！」

——と言うわけで……、

「……………」

仏像を足に乗せられズーンと落ち込むシグナム

(何こいつ可愛い)

その光景を楽しむ垣根は清々しい笑顔を浮かべていた

「……と言うわけでスバル仏像追加ね」

「……………え？」

そして、何故か仏像を乗せられるスバル

「え？ちよつと意味が……、

ぎあああああ！！足があ！！！！！！」

スバルは悲鳴を張り上げてジタバタするが仏像に足を抑えられている為にそれが出来ない

（なんか……、楽しんでる訳よ）

（私達は見なかった事にしときましょう）

そして、それらの光景から目線を外すその他大勢

「垣根、これも追加しといったほうが良いんじゃないかな」

すると、後ろの扉が開き、

満面の笑みを浮かべているのはが立っていた

「持ってくるの超大変でした」

「全くだ」

そして、その後ろには大きなシャチホコを担いでいるヴィータと絹旗

（ご愁傷様だなア）

涙目になっているティアナ達に思わず手を合わせる一方通行

「良かったなあー、テメェらこれで無我の境地に達する事が出来るぜ」

「う、嘘……ですよね……垣根教官……」

思わず、目の前の絶望に涙するティアナとスバル

ちなみにシグナムは既に放心状態だ……

——そして、開いた扉は音を立てて、ゆっくりと閉まってゆく

「い、いやあああああ……!!!!」

その後、管理局内に悲鳴が鳴り響いたのは言うまでもない……

六課でどうでしょう(前書き)

——若干短いと思いますがすいません

——では

六課でどうでしょう

――訓練が終わったその夜、

シグナム、スバルとティアナは感覚が全くない足を抑えたまま倒れていた

（何だアこりあ…何処の殺人現場ですかア？

てゆーかア死んでねえかアレ）

一方通行は憐れみの視線をスバル達に向ける

「ハイハイ、起きろ終りだデメエら」

垣根はそう言っているとバケツ一杯に張ってある冷水をシグナム達にぶっかける

（（拷問かよ……））

その光景を見ていたその場にいた全員は思わず顔をひきつらせる

「ぶう!!……、

は! 私達は今まで何を」

「皆、気絶してたんだよ、大丈夫?」

フェイトは目を覚まして起き上がるスバル達に心配そうに訊ねる

「よく、この修行に耐えきったな、

テメェら誉めてやるよ」

垣根は倒れ伏しているスバル達の頭を撫でて微笑む

「そんなお前達にプレゼントだ」

垣根はそう言うど鬼の様な形相をした何かを取り出しスバル達に手渡す

「これ……って？」

「……ナマハゲだよね」

手渡されたそれを見て苦笑いを浮かべる二人

「ああそれね、原チャリで東京から北海道に行くときに拾った

あ、シグナム、お前はこれな」

そして、シグナムに手渡されたのは秋田こまちと書いてある米袋

（……何で米袋？）

その場にいた全員は訳の分からない垣根の行動に首を傾げる

「全くお前は毎回意味が良くわからねエな」

「……ウルトラマンTシャツ着てるお前に言われたら俺も終わりだな」

と呆れたように返す垣根に一方通行は青筋を立てる

「……お前、後で絶対にぶち殺す」

「やめとけやめとけ、どうせキリねえから」

(……まあ確かにこの二人が争っても結局無駄って訳よ)

怒りを露にする一方通行を宥める垣根の一言にフレンダは納得したように頷く

「……ハイ!と言うわけで君達には今から地球に行ってもらいますってことで良いだろ、はやて?」

「……………毎回の事ながらアンタ説明ぐだぐだやなあ」

と垣根の無茶振りにひたすら苦笑いを浮かべるはやて

「ええと、垣根がいきなり訳の分からない説明やったと思うが、

そう言う訳や、突然とは思うけど、

機動六課は数日後に出張で地球に向かう事に決まっちゃいました

……ええか？皆」

「「……………」」

はやての言葉に絶句し立ち尽くす計二名

「おい、フェイトーなのはー戻ってきなさいー」

「超放心状態ですね」

立ち尽くすなのは達の目の前で手のひらをヒラヒラと手を振る麦野に絹旗が言う

――しばらくして二人はハッと意識を取り戻し慌てて口を開く

「ち、ちよつとまっではやてそんな急な」

「そ、そうだよ、幾らなんでもいきなりすぎじゃないかな」

二人は何事なく説明するはやてを必死に説得する

「あ、ちなみにそれ言ったの俺だから、

反論は認めません

したらテメエらまとめて滅給な」

「「……………」」

と垣根からトドメの一言を放たれ、必死にはやてに説得を試みる二人は再び絶句する

——そして

「ハハハ…ナンテコッタイ」

（大丈夫かア？コイツらア）

こうして六課は地球に向かう事になってしまったのだった

―――
数日後

垣根率いるなのは達一同は地球に半ば無理矢理、来させられてしまった

「はい、と言うわけで今回はですねえ、

ここからスタートになってしまいました
どう思いますか？ 一方君？」

「いっやいやいやア

一言言わしてもらいますけどねエ……、

潮風パネエです」

「いや超なにやってんですか二人とも」

何やら訳の分からない事をしている一方通行と垣根に絹旗が思わず突っ込む

「何ってカメラマン、
ロケでしょうがぁ

なぁにいったんのよ全く」

「え？カメラマン？私カメラマンなんですか？」

垣根のまさかの言葉にひたすら驚いた表情を見せる絹旗

「……まあ、という訳ですねエ、

我々は今回、原チャリで日本列島横断……」

「何しに来たんだよお前等は!!」

ついにその場にいた全員は垣根の言葉に便乗する一方通行に突っ込んだ

「え? 違うの原チャリ横断じゃねえの?」

「何処のどうでしょうですか!

そんなアホな事は天然パーマさん達に任せときなさい!!」

その場においてひたすら慌てている垣根にティアナが大きな声を張り上げて言う

「違いますよ!今回はロストギアの回収でしょ二人とも!!」

「ロストギアの回収?

はて?果たしてそんなものあったけ?」

「…わっかんねェ」

（駄目だコイツら…）

一方通行と垣根は互いに首を傾げてそれを見ていた全員は頭を抑える

「まあひとまず何処かに移動しようぜ」

「ふむ、このままでは話が進まん」

ヴィータとシグナムは状況がこれ以上悪化させない為に全員に話す

「……それじゃひとまず私の家に行こうか」

「……そうしうか」

こうして垣根が率いる一同はなのはの自宅に向かう事になるのであった

――それから数時間後、

「ただいまあー」

「あー！久しぶりーなのはー！！」

なのは達は無事に翠屋という喫茶店に辿り着き、

中に入るなり、なにやら知り合いらしき人物と抱きつかれていた

「あ、アリサちゃん！！びっくりしたよお、」

「あはは、ゴメンゴメン」

二人は互いに距離をとり挨拶を交わす

「いやーこれはまた美味しいですねえ、一方君」

「そうですねエ、ミスター、

このコーヒーもなかなかの……」

「おい、その馬鹿二人、

なにいつの間にくつろいどるんや」

とはやては違和感なく翠屋でケーキとコーヒーを頼みくつろいでい

る二人に青筋を立てる

「大将!! 手羽先追加で!」

「あいよ! あんちゃん」

「「……居酒屋かい!!」」

もうハチャメチャな行動を取る垣根に思わず突っ込むはやてとテイ
アナ

「……お父さんも悪のりし過ぎだって」

「……ハハハ、見ない内に、また面白い人が増えたわね、なのは」

目の前で起こるとんでもなくぶっ飛んだ出来事に失笑するアリサ

「どうもはじめましてってミサカはミサカは打ち止めだよって貴方に自己紹介してみる」

「あ、どうもはじめまして、私はアリサって言うのよろしくね、

えっと……、打ち止めちゃん！」

そうして、打ち止めの頭を撫でて自己紹介をするアリサ

すると、しばらくして奥の方からまた一人の女性が姿を現す

「あー！みんな久しぶり！」

「すずかちゃんー！！」

素早く駆け寄る女性は嬉しそうになのは達に声を掛ける

「仲が良いって良いよねえー、一方君

あ、大将、ロールケーキ追加で！」

「ですよねエ、ミスター、

あ、ついでにイコーヒーお願いしますウ」

「まだやってたんですか貴方達は、

そして、ここは居酒屋ではありません!!」

と未だに馬鹿な行動を続けている垣根と一方通行に絹旗が突っ込む

「いやいや、まあアレだな、

アレ?……なんだっけ」

（大丈夫かよ、コイツ等）

こうして、翠屋での垣根達一同は、楽しく過ごすのであった

焼肉とていとくん(前書き)

——いやあ……、しばらく更新に時間がかかってしまった申し訳ない、

——では

焼肉とていとくん

——数時間後、

辺りはすっかり暗くなり翠屋で過ごしていた垣根達は砂浜にやってきていた

「何やってんですか？垣根？」

「見てわかんねえのか？」

「バーベキューだよBBQ！」

そして、砂浜にて全員を集めた垣根は大量の肉と野菜を用意していた

「……いや見ればわかりますけど」

「と言うわけで手伝え、お前等」

（（……なんて強引な））

ひたすら自由人の垣根に苦笑いを浮かべるその他大勢は色々と思う所があるなか

渋々、垣根のバーベキューの準備を手伝う

「……火起こして案外難しいのよねえ」

「麦野、原子崩しで火つけられないんですか？」

「…バカヤロウ!! ンな事したらBBQセットごと吹っ飛ぶわ!!」

物騒な事を言う絹旗に垣根がすかさず突っ込みを入れる

「そう言うときはな、こうすんだよ」

そう言うとき垣根は手のひらから炎を纏った堅い石を出現させる

「相変わらず便利屋なあ、垣根の未元物質は」

「……だよなあ家に一台は欲しいぜ」

「……オイオイ、テメエらそんなに誉めんなよ照れんだろうが……
って熱！」

垣根は手に乗せている火炎物質を炭火の中へと素早く入れる

「あつぶねー、火傷するかと思ったぜ」

「……大丈夫？垣根？……」

すると、心配そうに声を掛ける滝壺が垣根の腕を見ながら駆け寄り
訊ねる

「……あ、ああ、大丈夫ちゃ、大丈夫だ」

「……手見せてみて……」

滝壺はそう言うのと差し出された垣根の手のひらに自身が持っていた
ペットボトルの水をかける

「……一応、火傷してないけど水をかけておいた方がいい……」

「……おうありがとな、流石は滝壺だ」

滝壺の処置に微笑み感謝の言葉を述べる垣根

（……クソ、まさかの伏兵か!!）

（侮れないわね、この娘）

（おう…、なんだこの敗北感……）

気を利かせる滝壺にその場にいたシグナム達は思わず啞然としてその光景を見ていた

「垣根、ホントに大丈夫？」

「大丈夫だって、俺を誰だと思ってやがる」

心配して駆け寄るなのは垣根は微笑み訊ねる

「……メルヘンていとかん」

「……おい、聞こえてるぞロリコン白モヤシ」

横からボソリと答える一方通行に垣根は青筋を立てる

「はやくバーベキューしましょうよオ

私のお腹が」

「アンタはしょっちゅう食べてるでしょうが!!」

まだ肉焼けてないっての」

腹を空かせるスバルにティアナが怒鳴り言う

そして、その隣では乗っていた肉をひっくり返しているフレンダ

(……この焼き具合、完璧な出来栄えって訳よ)

「よし!それもらい!」

そして、フレンダの焼き上げたそれを横取りする麦野

「……………」

「…………モグモグ、どうしたの？フレンダ？」

何事も無かった様に声を掛ける麦野にフレンダは箸を持ったまま硬直している

「…………流石は麦野ですね」

「ありゃアしばらく立ち上がれねエなア」

その光景を見ていた絹旗と一方通行は憐れみの視線をフレンドに向ける

「おい垣根エー私の肉やるよー」

「え！マジかよサンキュー、ヴィータ」

と皿にヴィータから差し出された肉を垣根が箸でつまむ

「…………どうだ？」

「うっまゝ、やっぱり炭火焼き最高だぜ」

肉を食べて満面の笑みを浮かべる垣根にヴィータは顔を赤くして嬉しそう微笑む

（垣根ってこんな可愛い顔をすんのか／＼／＼／

反則だぜそれ！／＼／

「…………ぐう」

顔を真っ赤にしているヴィータを見て、隣で喉を唸らせるシグナム

「うーん……、

肉もいいけど、そろそろ手羽先も食いてえな」

（チャンス到来！！）

とシグナムはすかさず垣根に近づき、焼き上がった手羽先を持ち出す

「か、垣根！！良かったら私の手羽先をやるぞ！」

「……え！マジかよ！ありがとよシグナム！」

次はシグナムの手羽先に手を付ける垣根はソレを美味そうに口に運ぶ

「どうだ？垣根？」

「いやあうめえ！！……シグナム、テメエは最高だ」

垣根の言葉にハウ！とシグナムは顔を真っ赤にする

「……天然かア？」

「……天然ですね」

そんなシグナム達の様子を見て互いに頷く一方通行と絹旗

すると、絹旗は一方通行の方へ向き、肉をつまんでいる箸を差し出す

「ハイ師匠、超あーんしてください」

「……あア？」

突然の絹旗の行動に戸惑う一方通行は思わず首を傾げる

「……なんのつもりだァ？」

「ほら師匠、はやく超口を開けてください肉が冷えちゃいますよ」

絹旗からそう言われた一方通行は渋々、口を開きその中に肉を突っ込まれる

「……どうですか？」

「……まア悪くはねえな」

その光景を見ていたフェイトとはやては思わず顔をひきつらせる

（何、あの娘……！大胆過ぎじゃない……！！）

（クソ！やられてしもうた……！！）

心の中で二人は羨ましいと思わず内心で眩き

(……やるでフェイトちゃん)

(……了解はやて)

二人は互いに頷くと一方通行と絹旗へと近づいてそこに割って入る

「うわ超なんですか!!」

「二方通行、私の肉も上げる♪」

「うちのウィンナーもどうぞ♪」

そして、次々と箸を一方通行に差し出すはやてとフエイト

これには、一方通行も顔をひきつらせる

(……なんですかアこれはア!!!)

一方通行は箸で肉とウィンナーをつまみ上げ、

迫り来るはやて達を見て一歩つつ後退る

「…ありやりあ…、かわいそうにねえ一方通行…」

「あれには私も同情するわね……」

その様子を見て苦笑いを浮かべてる垣根と麦野

(……でも)

辺りを見渡せば皆が皆、

どんちゃん騒ぎで美味しそうにバーベキューを楽しんでいる

「あー!!…スバルそれ私の!!」

「……………うつまあい」

それは、かつて暗部の一人だった垣根にはどこか眩しく、そして虚しさを感じさせられた

(こごゆうのはやっぱり悪くねえな……)

頬を緩め、その光景を見ていた垣根は地平線にへと視線をやる

夜で薄暗く見えにくい月で照らされた海の光景はどこか神秘的な
雰囲気醸し出している

すると、その様子を見ていた麦野は垣根に声を掛ける

「……ねえ、垣根、もしかしてアンタはまだあの事…」

「……ん？」

麦野は微笑んでいる垣根に心配する様に訊ねる

「…いや、なんでもないわ！

それよりバーベキュー食べましょ、私のピーマンあげるわよ垣根、」

「あー！！デメエ！そりやお前が嫌いなもんだろーが！」

とピーマンが置かれた皿を持ったまま大きく声を張り上げる垣根

垣根のバーベキューはこうして楽しく終わりを告げたのだった

超銭湯（前書き）

——凄まじきかな垣根帝督

——では

超銭湯

「へえ…あの人がなのは達の上司ねえ……」

「なんか全然そんな気がしないんだけど……」

——砂浜にて、

なのはは久しぶりに会った親友のアリサとすずかに今までの経緯を
全て話していた

「にやはは…まあハチャメチャな人達で、
普段から周り（私達）を巻き込むのが当然みたいな感じだからね」

なのはのその一言に苦笑いするアリサとすずか

「…どんな上司それ…」

「というより出世の仕方が明らかにおかしいわよ

脅して出世なんて」

二人は話すなのはに呆れたように言う楽しくバーベキューをしている垣根達の方を見る

「一方通行アアアアア！！肉かえせえええええええ！！」

「ぎゃー!! ちょっと暴れないでくださいよ垣根!」

「早いもん勝ちだアクソメルヘン!!」

彼女らの視線の先には白い羽根を広げて暴れる垣根、

そして、それから出される凄まじい攻撃を軽々と受け流す一方通行の姿

「…あれが? 上司?」

「……うん、とりあえず二人とも見なかった事にして」

この光景を見た二人の反応になのはがつくりと項垂れて言う

「その肉はア俺のだアアアアア」

「あめえよ三下ア!!」

「あ!! 私焼き鮭が!!」

いい加減にしやがれ!! 代わりにテメエらの内蔵焼くぞコラアア!!
」

場は更に悪化し、麦野まで暴れだす始末に周りは騒然とする

「……収集がつかないって訳よ」

「ぎゃあああああ！」

「バーベキューセットがああ！！」

嘆く様に呟くフレンダと吹き飛ばされるバーベキューセットを見て
思わず悲鳴を上げるスバル

——そして、それから数十分後……

「……ここ、何処の被災地かな？はやて」

「フェイトちゃん…、

ここはあえて目を背けといった方がええ…」

砂浜のバーベキューセット（その他諸々）が垣根と一方通行、そして麦野によって完全に大破され啞然とするフェイト達

「うわぁん！！お肉ー！！」

「アンタは十分食ったでしょうが！！」

嘆くスバルにティアナは声を張り上げて突っ込む

「……なのはも大変だね色々……」

「……とりあえずファイトとだけ言っておくわ」

二人は項垂れるなのはの肩にポンと手を置いて砂浜から立ち去って行く

「あれ？もう帰るの？二人とも」

「うん、私達これから用事があるから」

立ち去るアリサ、すずかの二人は立ち直り訊ねるのはに微笑み答える

一方、砂浜で凄まじい戦鬪を繰り広げたレベル5達はと言うと……、

「うげエ…、クソツタレ、口に砂が入りやがった」

「肉ウとつたどォー!!」

「チキショー!ざけんなよテメエら!服が砂まみれじゃねえか!!」

一方通行から奪い取った肉を高々に空に掲げる垣根、

そして、砂まみれになって憤慨する麦野の姿

「そして頂きます!!」

……ぶえ! 砂が付いて不味い……」

「「不味いんかい!!」」

あれだけ暴れて一方通行から手に入れた肉を吐き出す垣根にその場にいた全員が思わず突っ込む

「うわあ、それにしても砂まみれだねみんな……」

「まあ、アレだけ派手に暴れればそうなる」

砂で服が汚れているフェイトにシグナムがため息を吐き言う

「うーん……あの人はなんであんなにバカなのってミサカはミサカは呆れてみたり」

「……それはね、ばかだからだよ……」

砂まみれの服を叩く打ち止めに滝壺は答える

フェイト達にとって正に、台風が通りすぎたような惨状だ

コレを見かねたのは何かを思い出した様に全員に話し出す

「……ねえ皆、今からスーパー銭湯行かない？」

「」「戦闘？」「」

「…いや、超字が違います……」

絹旗はなのはの言葉に反応する全員に対し冷静にツツコミを入れる

「……スーパー戦闘ねエ…」

「略して超戦闘か!!」

「だから超字が違うって言ってんでしょうが!!馬鹿二人!!」

全く訂正する気のない二人に対し絹旗は遂に青筋を立てて怒鳴る

「よっしゃ!そうと決まれば行くぞ野郎共!! 銭湯に殴り込みナリ

「！」

「垣根、本当に戦闘しに行く気満々じゃないですかソレ」

もはやノリノリの垣根には絹旗の言葉などは届いてはいない……

――

――それから数時間後、

垣根達一同はスーパー銭湯の前に来ていた

「デメエら!!ぶうきわアもったかアアア!」

「……オオ!!」

「……超なんの集団ですかコレ」

銭湯セットを掲げて宣言する垣根に皆は手を挙げて応え、

それを見ていた絹旗は呆れたように呟いていた

「それじゃエリオ、私達と一緒に入ろう」

「い、いや僕は垣根教官達と…」

男湯に入ろうとしたエリオはフェイトに止められる

すると、それを見ていた一方通行はフェイトに話し掛ける

「待ちなア、フェイトオ……そいつはやめておいた方が良い」

「……なんですって」

一方通行の言葉にフェイトはピタッと話すのを止める

「俺はアかつて……その行為に及んでエ…
シヨタコンの名称を勝ち取ったア奴の事を知っている…」

「……………」

黙って聞いていたフェイトはその一方通行の言葉に妙な説得力を感じていた

（アイツかあ）

（（あの娘の事ね））

その場にいた暗部の全員は瞬時に理解して黙って納得する

「そう言う訳だアやめとけフエイトオ…」

「……うん、そうするわ」

こうしてエリオの女湯投下は免れたのだった

——とその頃

「……ぶえくしゅ」

（誰か噂したのかしら）

一方通行から噂された当の本人は、全く気づいてはいなかったとさ…

――――

―――― 銭湯内

「やーい、死ねや一方通行!」

「バ垣根エ！お湯かけんな！！そしてはしやぐなアホオ！」

「……ハア」

その後、銭湯に入った垣根達はゆっくりとお湯に浸かっていた

「……あの垣根教官、

さっきから頭に何乗っけてんですか？」

「あん？これか？、

さっき砂浜で拾った昆布」

昆布をヒラヒラとさせて返答を返す垣根にエリオは啞然とする

(……こ、昆布って?)

「これでダシとれっかな？」

「……エリオ相手にすんなア馬鹿が写るぞオ」

すると、隣でさっきから垣根の羽根に水をかけられている一方通行が呆れたように口を開く

「大丈夫だ問題ない」

「……お前に無くてもお湯が大惨事だ」

段々と茶色になっていく銭湯のお湯を見ていた一方通行はため息を吐く

「……昆布のダシ、効いてますね」

「だな…お吸い物だ完全に」

お湯を少しだけ飲むエリオに一方通行も頷いて互いに肩を落とす

「……うーん？もうちょい濃い方がいいか」

「…お前エもう喋んなア」

このアホな垣根の行動にもう呆れるしかない一方通行はとりあえず
黙らせる

「それにしても良かったです男湯に入れて、
有り難うございます一方通行さん」

「フン……そいつはア良かったなア」

お礼を述べるエリオに一方通行は素っ気なく言う

「……昆布ビントー!!」

「へぶしー!!」

すると、何を思ったのか垣根は頭に乗っていた昆布で一方通行の顔をひっぱたいた

「…ツンデレなんてなあ!流行んねえんだよ!!」

このモッヤシィーノ四世が!!」

「目にイ目に昆布がアアアアア!!」

「なんですか、そのイタリアンな名前？」

顔を抑える一方通行に話す垣根にエリオが呆れたように突っ込む

「……良かったな昆布、

…今日からテメエが学園都市、第一位だ」

「……いや、なんか強いですね昆布」

関心するようにエリオがそう言うと垣根はタオルを腰に巻いてお湯から立ち上がる

「どうしたんですか垣根さん？」

「……今からスーパー銭湯に戦争を仕掛けるぞエリオ」

垣根はそう言うのと頭に乗せていた昆布を手の平に移して何かをし始める

「……あの？何してるんですか？」

「……今、昆布を、絶対能力者（レベル6）に変えているとこだ…」

垣根はそう言うと言変色する昆布を見詰めてエリオの問いに答える

「……演算終わるぞ」

——そして、その垣根の手のひらには

「……カツオ節？」

でっかいカツオ節が乗っかっていた

「よし……」

（馬鹿だ…、この人完全に馬鹿だ…）

エリオは内心で何度もそう呟きつつもあえて声には出さない

「行くぞエリオ、その馬鹿を引きずって来い」

垣根は立ち上がり絶対能力者（カツオ節）を装備したままある場所へ向かう……

——彼の向かう先は混浴と書かれた露天風呂であった……

湯煙とていとくん(前書き)

――更新致します、

――ではでは

湯煙とていとくん

「うつひよー、流石は露天風呂だなあ」

「ねえ、止めましょうよ垣根教官…やっぱり不味いですって!!」

———露天風呂

カツオ節を装備し、早まった行動に走る垣根にエリオは留まる様に促す

「今更なに言っただお前、

男なら腹くくれ!!やるっきゃねえだろ」

思わず、何をだよ!!と突っ込みたくなるエリオだが、

そんなことをしていれば、その内に間違いなくこの男はカツオ節を
露天風呂へと投下する

(……一方通行さぁん!!助けてえー!!!!!!)

エリオは引きずってきた一方通行を横目に垣根を羽交い締めにして
心の中で助けを求める

――…がしかし、

「……ぐう目がア」

……未だに昆布のダメージが残っているのか両手で顔面を抑えていた

「離せえい無礼者お!!」

「お止め下さい殿――!!」

じゃなかった!

やめてください垣根教官――!!」

垣根のペースに引き込まれていくエリオはもう限界に近かった…

(……ねえパトラッシュ、寒いよ僕)

ふとエリオの頭にそんな映像が鮮明に流れてくる

——素っ裸で外で暴れていては寒いのも当たり前である

このとんでもなく意味不明な状況に立たされているエリオ。

最早、是非もなし、とエリオが絶望し、諦めかけたその時だった……

「あらエリオ君だあー何やってるのー？」

——向かい側からエリオの前に見慣れた金髪の女神が姿を現す……

（……た、助かった）

「離せい！！離せい！！」

ジタバタする垣根を止めているエリオは思わず安堵する

そして、早速助けを求める為に現れたフェイトに助けを求める

最早、混浴など今の彼には関係無かった……

「助けてください!! フェイトさん!!」

この馬鹿……!! じゃなかった!

垣根教官が血迷った行動をしようとしてるんです!!」

エリオは必死に垣根を抑えたままフェイトに叫ぶ

「……全く何をやっとするのだ貴様は」

「…全く、ホントになにやってるんですか垣根、」

「にゃはははー…」

フェイトの後ろから次々と現れる女性陣達

しかし、その楽しそうな会話も垣根が暴れ、片手に持っている物を目にしてピタリと止まる

（（ああ……、もうあの馬鹿が、大々何をしようとしてるのか分かった……）（））

その様子を見ていた絹旗とヴィータもエリオの加勢に入る

「ええい、馬鹿者離さぬかあー!!」

「止めてえー超止めて!! 何やってんですか!!」

「垣根!! それは流石に駄目だぞ!!」

しかしながら、この三人に止められているにも関わらず垣根の進行は一向に止まる気配が無い

「お吸い物じあ！！お吸い物を作るのじやーウヒヒヒヒヒヒ…」

「……なんやアレ」

「垣根が壊れてる」

なのは達の言葉に、まあ、元々だけどさ、と付け加える麦野

——そして、絹旗達が格闘すること数十分……

「……かあきねえ……テメエの血で良いダシを取ってやるぜエ」

「ウヒヒヒ…、

……え？」

とこんな感じで復活した一方通行に血祭りにされた垣根は頭から大量の血を流して大人しくなったのだった

「……………」

「ねえ、落ち込み過ぎだよ垣根、元気出して」

なのはは頭を未元物質で作った包帯でグルグル巻きにして、
露天風呂の端っこでショボーンとしている垣根をとりあえず励ま
していた

(…そんなに落ち込む事じゃねえだろ…)

思わずその場にいた全員が心の中でそう突っ込みを入れる

「……だってさあ俺さ、

露天風呂で大量のお吸い物を作るのが夢だったんだもん……」

「…って!! なんて迷惑な夢ですか!」

愚痴を溢している垣根にお湯に浸かっていたティアナが思わず突っ込む

「……やっぱり垣根は垣根だねって、ミサカはミサカは呆れてみたり」

「……人間の本质が基本アホだからね垣根は……」

打ち止めの言葉に隣でお湯に浸かっていた滝壺が頷き答える

「……師匠!! 背中超流します!!」

「……あア!？」

と露天風呂に浸かる一方通行に近づいて抱き着く絹旗

「あ、ちょっと!!それなら私が流すよ一方通行!!」

「何を言うとするんやウチが流す!」

またもや一方通行を巡り露天風呂から立ち上がるフェイトとはやて、

「ナイス、オッパ○有り難うございます」

「欲に忠実だね」

その時、瞬時に頭を下げてお礼を述べる垣根になのはは不気味に笑みを浮かべて言う

「オイオイ、まてまて

こんなところでスターライトなんちゃらなんて使っちゃ駄目でしょ」

どこから取り出したのか知らないがレイジングハートを向けるなのはに両手を上げる垣根、

「お話し……しようか？」

「だが断る」

そう言うと同時に出されたスターライトブレイカーを何事も無かったように未元物質で防ぐ垣根

「誰かあの馬鹿を止めて上げて……」

「……無理って訳よ」

露天風呂にのんびり浸かる麦野の一言に左右に首を振るフレンダ

「いや流石になのはやり過ぎだよ」

「……離してフェイトちゃん、私の堪忍袋はもうはち切れたから」

そう言うのと羽交い締めになっているフェイトに凄まじい殺気を醸し出すのは、

「そんな素っ裸でタオル巻いた状態でカッカすんなよ、

ホラよ、未元牛乳やるからカルシウムとれカルシウム、」

垣根はそう言うのと殺気を出すのはに未元物質で作った牛乳を差し出す

「ブッ飛ばさないと気が済まない……かな」

「キャラが変わってるわよ、なのは……」

怒りを露にしているのはに麦野は苦笑いを浮かべる

「……と言うわけで俺は飽きたからもう銭湯上がるわ、

そしてなのは、テメエに一言だけ告げておく」

垣根がそう言うときレイジングハートをピタリと止めるなのは

「……ナイスプロポーションだ!!」

「……………」

親指を立てて微笑む垣根になのはは固まって言葉が出ない

「アイツはああゆう奴だから諦めなさい……」

宥める麦野に、そうね、と頷き答えるのはは、がっくりと項垂れていた

こうしてやりたい放題した垣根は銭湯を後にするのであった

垣根と記憶（前書き）

――…今回はていとくんシリアスでえす

――ではでは

垣根と記憶

――夜の海鳴町の砂浜、

「おお…、コレってオーシャンビュー…って奴じゃね！

いやぁ実に趣き深いねー」

銭湯から一人帰った垣根は、暇潰しに先程の浜辺で夜の海を眺めていた

「……あ、そういやあ、風呂上がりに卓球すんの忘れてたな

一方通行の奴を適当に言い丸めてやりや良かったぜ」

垣根は笑みを溢し、ふと思い出した様に口を開き呟く

「……たく、風呂は早く上がるもんじゃねえな、

全くやることがねえ」

頭を掻いて海辺で大きく呟く垣根は夜の海を見詰める

——…とその時だった

垣根は自分の背後から嫌な寒気が伝わりピタリと足を止める

「……誰だ…」

——凄まじい殺気を込めた一言、

それは、先程までおちゃらけた様子の垣根とは全く違い、

冷徹で酷くピリピリした雰囲気醸し出している

すると、垣根の後ろから愉快的笑い声が聞こえてくる

——白衣を身に纏ったその男、

「カハハハハ！！…あれ随分と楽しそうじゃないですか垣根帝督ウ」

「……木原、」

……そうその男は顔に刺青を入れ、不気味な笑みを浮かべている木
原数多であった

「俺に何の用だ？殺されにでもきたのかオイ、

……三秒以内に視界から消えねえと、跡形もなく俺が消し飛ばすぞ
コラ」

六枚の羽を大きく広げて殺気を込めた一言を放つ垣根、

「あー怖い怖いねエ、流石は第二位様ってか、イラつくぜ」

しかしながら、木原は相変わらず余裕の表情で垣根にゆっくりと口
を開き話を始める……

「……心理定規……」

その言葉を聞いた瞬間、垣根は目を見開きピタリと硬直する

「凶星かア第二位……」

確信した木原は不気味な笑みを浮かべ硬直する垣根に言う

「……テメエ……」

「……いちいち面倒くせえ女のことなんて憶えてねえてか？

なあ……、垣根帝督よお」

木原は驚きを隠せない垣根に愉快に笑みを浮かべる

「……暗部肅正計画たあ、

またアレイスターもえげつない事をしたもんだ」

「……っ！……木原アアア！！」

凄まじい爆発音と共に垣根から繰り出された攻撃を木原は易々とかわし、

そして、垣根は鬼気迫るような凄まじい殺気と眼光を攻撃をかわした木原に向ける

「黙れ!!…それ以上下らねえ事喋りやがったらテメエを跡形もなく消し飛ばす!」

「……待て待て、そう興奮すんなクソガキ
テメエにいい話を持ってきたんだぜエ?」

木原はそう言うのと垣根にゆっくりと話し出す

「……もしそいつが生き返るつったら、

……テメエはどうするよ」

全てを破壊する垣根が開いた六枚の羽根はピタリと制止する

「な……ん……だと」

垣根は話す木原に対し驚きを隠せず目を見開き言葉を発する

「……………んなこと……………」

「……………ところが出来るってなァ、残念ながら」

すると、垣根に話を続ける木原はパチンと指を鳴らす

しばらくすると、暗闇の中から一人の男性が現れる

「……紹介してやるよオ、

ジェイル・スカリエツティだ」

「はじめまして、君が垣根帝督君…かな」

同じく、白衣を身に纏ったその男は木原の横に並び笑みを浮かべている

「…ハッ……、頭の中が腐ったマッドサイエンティストが二人…か…、笑えんな」

垣根はそう言うのと羽根をしまい、現れた二人を睨み付ける

「……待ちたまえ、垣根くん、

君の心理定規なら生き返えらす事は出来るよ」

「……確信はねえ、信用出来ねえな、

それに話が上手すぎる……」

スカリエッティの言葉に左右に首を振り答える垣根

「――条件付きか……」

そして、垣根は前方で面倒そうに頭を掻いている木原に訊ねる

「まあそうなるなア」

笑みを溢す木原に隣で悲しげな瞳で垣根を見詰めるジェイル

「……そうかよ、やっぱりな、

アレイスターの指示か」

「……流石は第二位様だ勘が鋭いな」

ため息を吐き淡々と答える垣根に愉快に笑い声を上げて頭を抑える
木原

「……まあ垣根え、今はテメエの心理定規を生き返らせる事はア証明できねえが、いずれテメエは俺のこの仕事を受ける事になるだろうな……」

垣根は目を閉じてゆっくりと口を開き話し出す

「……俺は――」

……とその時だった、

凄まじい轟音と共に木原達のところへ魔法が打ち込まれる

「……チィ…、

潮時か、ジェイル巻いて帰るぞ!!…」

「分かった……」

木原とジェイルの二人はこうして垣根の前から姿を消す

「大丈夫！垣根！」

「クソ逃がしたかア」

そして、垣根の目の前に現れるのはと一方通行

「……何ともねえよ、……ってゆうかやり過ぎつうのお前らそして
空気読め」

「デメエに言われたくねえよ……」

助けに入った筈の一方通行はいつもとは違い何故か怒らない

隣にいたなのはも、垣根に笑い掛け話し出す

「……まあ、今回は取り逃がしたみたいだけど、また出会った時に捕まえればいいよ

はやくホテルに戻ろう二人とも」

「おオ、そうだなアあいつ等が心配しやがるから帰るか」

なのはの提案に頷き答える一方通行、

しかし、垣根は何事も無かった様に振る舞うそんな二人のやり取りを見てゆつくりと口を開き話し出す

「……聞かねえのか俺が何話してたのか、」

垣根は踵を返す二人に対し、夜の海へ視線をやり訊ねる

「どうせ話す気無いんだよね……」

なのははそう言うのと俯いて、訪ねてくる垣根に言う

「……………悪いな」

一言申し訳なく呟く垣根、

すると、俯いていたなのはゆっくりと口を開き話し出す

「……………ずるいよね垣根は、

あんな風に楽しそうに立ち振る舞ってる癖に……………自分の事を偽ってるなんて……………」

「……………オ、オイ、なのはア……………」

突然話すなのはに一方通行は戸惑い、思わず声を掛ける

「……偽ってる訳じゃねえ…

楽しいさ本当にな」

夜の海を眺めて笑みを溢しなのはに答える垣根、

だが、なのはは納得がいかないのか垣根に向かい更に話を続ける

「……じゃあ、時折辛そうな顔をするのはなんで？」

「……辛くなんてねえよ」

垣根は俯いているなのはの問いに淡々と答える

すると、なのはは諦めた様に肩を落とす

「……分かった、

あんまり問い詰めたところで仕方ないよね……」

「……………」

無言のままなのは話を聞く垣根はため息を吐く

「そう落ち込むっての……いずれな、」

「……うん分かったそれまで待ってる」

……嘘、

垣根はなのはに嘘をついた…、

話す機会は恐らく無いし、話す気など全く無いのだろう……

——…隣にいた一方通行もなのはに答える垣根を見てそれを確信していた

(垣根……テメエはア……)

一方通行は思わず垣根の表情を見て、思わず顔を曇らせる……

…静かな暗雲が垣根と一方通行に徐々に迫りつつあった……

ホテルにていとかん（前書き）

垣根「ギャグ入りまーす」

一同「ハイ喜んで!!」

ホテルにていとくん

――木原数多との接触から数日後、

地球から帰った垣根はクロノからせがまれてパーティーの出席を強要されていた

「あん？ホテルでパーティーだあ？

面倒くせえテメエが出ろよ杉田、」

「違います杉田じゃないです！！

垣根会長お願いします、一番偉い貴方が出席しなければならない大事なパーティーなんです！！」

クロノは回る椅子でクルクル回っている垣根を必死に説得し、パーティーに出席するように御願する

「あーうるせえ、うるせえ、テメエはいい加減目え覚ませ、

木刀でも腰に差して毎日イチゴパフェでも食ってろよ……たく」

垣根はため息を吐き強要するクロノに耳を傾けようとはしない

「では……いったいどうすれば出てくれますか？垣根会長？」

「そうだなー…、ホテル会場で千の風になってでも歌うってなら出てやるよ」

垣根の言葉に瞬時に氷結したように固まってしまうクロノ、

「……わかりました」

「うん！偉い！座布団一枚挙げよう」

茶化す様に拍手する垣根に、可哀想な物を見るような眼差しをクロノに向ける六課一同、

(あの…クロノ君が…)

(良いように垣根に弄ばれとるな…)

(…悲惨だ)

シグナムの言葉に一斉に頷く機動六課一同、

「オイ、ジョン・スミス、パーティーはスーツか？」

「……だから違いますよ、誰ですか、

……出来ればスーツをお願いします」

ため息を吐き呆れように思わず頭を抑え垣根に頼むクロノ

「あっそ、なら、ジャージで出よう」

「オイィ！！いい加減しろォ！！」

こうして垣根は六課と一方通行達はパーティーに出席する事が決まったのだった

――それから数日後、

パーティーに呼ばれた垣根達一同は会場にやって来た

「……あア、めんどくせえなんで俺がアこんなもんにでなきゃなんねエんですかア？」

「愚痴を溢すんじゃないよ、我慢しろい！！
俺だって不満なんじゃない！！」

一方通行と垣根は会場の中央で互いに愚痴を溢していた

一方通行はスーツに髪をガチガチに固めてオールバックにしており、

垣根は……、一人、全身黒いジャージで浮いていた

（何やってんだあの馬鹿……！）

思わず物陰で垣根の様子を見ていたクロノはがっくりと項垂れる

「すみません師匠、超待ちましたか？」

「これ胸元がちょっとキツいかも」

「…うーん？私もジャージの方が良いかな…」

「…う…着なれない物は着にくいつて訳よ」

そして、そんな風に愚痴を溢している二人の元へ現れるドレスアップしたアイテム一同、

「おお眼福だな、似合ってるぜ、テメェら」

「あんた結局ジャージで来たの…？」

ドレス姿を褒める垣根のジャージ姿を見て呆れたように言う麦野

「……俺は常識に縛られねえ！！ただそれだけだ」

（（要するにただの馬鹿だな））

その言葉を聞いて同時にため息を吐く麦野と一方通行、

すると、しばらくして三人の女性が二人の元へ姿を現す

「待たせてごめんなあ一方通行ー」

「……似合ってるかな？」

「……にやははは」

顔を真っ赤にしてドレス姿で現れる三人は恥ずかしそうに垣根達に訊ねる

「いやあアレだな美人だらけで、お父さん嬉しい……」

「泣くなア、馬鹿」

一方通行はジャージ姿で片手で目を覆う垣根に突っ込む

一方通行と垣根を見たドレス姿の三人はと言うと……

（……一方通行がオールバックやと！！）

（……カッコイイ……）

(……やっぱり垣根はジャージなんだ)

一名を除き、一方通行のスーツ姿に歓喜するフェイトとはやて

すると、しばらくして垣根に近づく一人の黒服を着た男性

「……垣根様、こちらにお願いします」

「……ん？もうこんな時間か……分かった」

と黒服の男が先導する後に続いて歩くジャージ姿の垣根

「……今から何があるんですか？」

「……あア、どうやら垣根のスピーチらしいぜエ」

その一方通行の言葉を聞いた場にいた全員は不安で一杯になる

（大丈夫……かな）

(不安しかないよね)

(…早くパーティー終わンねエかなア…)

それから数分の後にジャージ姿で壇上に上がる垣根、

その姿をみた会場に來ている全員は騒然としていた

(……まあ当たり前前の反応って訳よ)

そして、マイクを握った垣根はゆっくりと口を開き話を始める

「やあ諸君、パーティーを楽しんでくれているかな、

生憎、このパーティーにこの俺の姿を見て疑問に思う輩も多いと思う……」

そう言うところ垣根は片手を上にかざしてパチンと指を鳴らす

すると、さっきまで着ていた筈のジャージはスラックスとブランドのようなスーツに変わり

いつの間にかワックスで整えられた髪型になっている垣根、

「……生憎、俺はエンターテイナーでな、
こうやって楽しいパーティーにはサプライズが付き物だ」

それと、同時に拍手が巻き起こり、パーティー会場にいた女性からの黄色い声が垣根に向かい沸き上がる

（……垣根が！！）

（……輝いて見える！！）

思わず口元に手をやり驚きを隠せない麦野となのは、

「……さて、では本題に入ろう

……君達が知っての通り、時空管理局は俺が最も偉く成るまで、

正直、管理局は腐っていると云っても過言では無かったと思う」

垣根がそう言う与会場の彼方こちらから笑い声が聞こえる

「しかし、俺は一々質量兵器とか、保有しなくても国一つ潰せます、

あそこにいる白髪ロリコンも例外ではありませーん」

会場に集まっている人々はそれを聞いた途端に顔を真っ青にしている

「まあ？要するに？俺達はいくまで人民の味方であり、

それを脅かす阿呆は塵も残さず肅正しますって事でよろしいかな？」

「言い訳あるかぁー！！！」

機動六課一同と一方通行達からの総勢での突っ込みがスピーチして
いる垣根に放たれる

「――以上、垣根帝督でした、丸」

「……作文かよオ」

こうして垣根のスピーチは無事に終わりを……

「……あ、あと、クロノ、テメエは千の風になって歌えよ今から」

やりたい放題に告げたのだった

ていとうんとパーティー(前書き)

――更新します――

――感想お願いします、ではでは――

ていといくとパーティー

あの悪夢のような意味の分からないスピーチから数分後、

——ホテル会場にて

「あー腹いてえ…ひい!!」

クロノがホテル全員の目の前で歌を歌うの光景に垣根はゴロゴロと地面に笑い転げていた

勿論、垣根をはじめ辺りにいた客人達全員はクロノの歌に凄まじい
大爆笑：

「クロノ君…可哀想だね…」

「ありア、一生トラウマになんなア…」

その悲惨な光景に憐れみの視線をクロノに送る機動六課と一方通行
達一同、

「
W
W
W
W
W
W
W
W
W
」

垣根はと言うと、もうお構い無しに笑い声を高々に上げていた

（ここで笑ったら駄目です絹旗最愛！…しかし…ブホ！…？）

（……ひい…駄目だわツボツた…W W W W）

（……だ、駄目や持たへん！！……ククク！！）

しかし、思わず笑いを堪えずに吹き出しそうになっているその他数名はなんとか我慢している

そして、クロノの歌が歌い終わり、一段落つく垣根達一同、

「あー…笑った笑った腹が破裂寸前だった…」

すると、拍手をクロノへと送る垣根、

その顔は笑いすぎにより半ば涙目のようになっている……

（…辞めようかな仕事）

ふと、歌い終えたクロノは心の中で呟き、がっくりと落ち込むのだ

った……

それからしばらくして、

様々な混沌に周りを陥れた垣根は、

パーティーの様々な要人達と色々な会話を交わしていた

「…いやはや、まさか垣根殿がここまでユーモアがある方だとは思ってもみませんでした」

「喜んでもらえて光栄ですね」

ワインを片手にそれらしく振る舞っている垣根は先程とはうって変わり、

周りから見ればとても様になっている

「……垣根のあの豹変振りには、毎回驚かされるわねえ全く」

要人達との会話を何気なくする垣根の姿に麦野は思わず呟く

「……垣根って、実は管理局の女性達からメチャクチャ人気があるんだって」

「……え？全然知らなかった!!」

フェイトのまさかの一言に口元を抑えて驚くのは、

「アレ？フェイトちゃん、一方通行はどなんしたん？」

「えっ…さっきまでそこに……」

フェイトがそう言うとその場にいた筈の一方通行が消えている

(……あれー!!?)

一方通行を探す様に辺りをしばらくし見渡すフェイト、

そして、ピタリとフェイトの視線が止まった先には……

「なあに久しぶり会ったんだからさあー別にミサカといっても良いじゃないかよークソモヤシー」

「貴女はまた相変わらず口が悪いんだねって、ミサカはミサカは番

外個体に呆れてみたり」

「ねえ、どういふことかしら一方通行、

今まで音信不通だったてのは」

打ち止めの傍でドレス姿をした可愛らしい女性二人に囲まれている
スーツ姿の一方通行だった

そう、この二人は何を隠そう暗部組織グループのメンバー結標淡希
とシスターズの番外個体である

この訳の分からない状況下にいきなり立たされた一方通行は半ば頭
が混乱していた

（誰だァ！！コイツ等と呼んだのはァ！！）

視線を真っ先に元凶であろう人物に向ける一方通行、

修羅場、もしくは混沌の原因であろう本人は白々しく一方通行から
視線を逸らす

（やっぱりかァァ！！！！）

そう、全ては我等が偉大なるていとくんの仕業であった

垣根はとりあえず周りにいた要人達を取り払い、

殺気を醸し出している一方通行へと近付いて話し出す

「いやー…ワリィワリィ一方通行、そう言えば言うのうつかり忘れてたわ……てへ」

「てへ、じゃねェ!! どういう事だァこれはァ!!」

悪ふざけが過ぎる垣根に胸ぐらを掴み迫る一方通行

「止めろ止めろ、揺らすな揺らすな、吐く、吐くから」

そう言うのとピタリと垣根の肩を揺らすのを止める一方通行

すると、垣根が二人について一方通行へと語りだす…

「いやさー、この間さー…、

お遊び半分で未元物質で色々と作ってたらさあ、

この二人が羽根から湧き出てきたんだよ」

その時点で意味が分からないと言いたげな一方通行だが垣根の話を最後まで聞くことにした

「んでさー、今日、パーティーがあるから適当に呼んだわけ、
そう言う事分かった？」

「……お前が死にたいのはよくわかった」

満面の笑みを溢す垣根に怒りを露にしている一方通行はボキボキと
拳を鳴らす

「へい警備員カモン！！ここにロリコン……グボー！！」

「……人様に頼るな三下ア!!」

不意に顔面に一方通行の拳が入り思わず擦る垣根

「ハハハ……、分かった分かった愉快なオブジェになりてえみてだなア第一位!!」

「そしてエ、人様のセリフをパクるんじゃねエ!!」

すかさず白い羽根を広げた垣根は笑い声を上げる

すると、そんな垣根の目の前に現れる二人の女性

「「……止めようか垣根、
これ以上はブチコロシか・く・て・い・よ……」」

そう、正しく、鬼のような顔をした麦野となのはである

「……………」

無言になり青ざめる垣根の羽根はショボーンと落ち込み何故か垂れていた

「それでー……、一方通行？」

「この二人は誰なんや？早く吐きいや？」

案の定、その後フェイトとはやてに問い詰められる一方通行はただただ後退る

「は、はーん…、

アナタはまた女を引っ搔けてたんだー死ねよモヤシ」

「何かしらコレは？説明してもらえる？」

双方からの言及が止まない一方通行はひたすら顔を真っ青にする

（やべエ…、なんだこの状況はア）

気付けばダラダラと冷や汗が一方通行の頬を伝う

——…と一方通行が窮地に追いやられていたその時だった

こちらへと近付いてくるスーツ姿の男性が二名

「おやおや、これはまた面白いものが見れましたね」

「全くだぜい、元気で何よりだ一方通行」

「……、テメエら!!」

そう窮地の一方通行の前に現れたのはグループのメンバー、土御門元春とエツアリだった

「……なんでテメエらがここにいやがんだ」

「おや、これはまた面白いですねグループが勢揃いです」

「「…グループ？」」

その場にいたなのは達全員は首を傾げて話すエツァリに聞き返す

「前に俺がテメェらに話した暗部組織の事だア」

「ああ、そう言えば言うてたなあー」

はやては今頃思い出した様に口を開き呟き言う

「…超驚きですね師匠、私の他にもこんなにも女性を引っ掻けてたなんて…」

「貴方にももしかして常識は通用しないの？ってミサカはミサカはため息を吐いてみたり」

大勢の女性に囲まれている一方通行を見てため息を吐く絹旗と打ち止め

「ちげエ！！誤解だ！俺はアそんな覚えはねエ！！」

「男の言い訳何てものほど見苦しいものはありませんね」

「全くだニャー」

それを楽しんでいるグループのメンバー二人は互いに頷く

――とその時だった

凄まじい爆発音と共にパーティー会場から煙が上がる

「……な、何!？」

「……ん？」

そして、パーティー会場に次々と入り込んでくるガジェットの姿

そして、混乱するパーティー会場から逃げ惑う人々

しかし、次の瞬間爆発音と共に六枚の羽根を広げガジェットを吹き飛ばす

「誰だこんな無粋な真似しやがったのは」

垣根は眉間にシワを寄せて辺りを見渡す

「やっぱりな」

「思った通りでしたね」

垣根の両脇から現れるエツアリと土御門

「……え？ お前ら居たの？」

「いまさらか!!」

今頃、自分達の存在に気が付く垣根に土御門は思わず突っ込みを入れる

「……たくしょうがないわね」

「あれなんなわけー」

そう言いつつも次々とガジェットを破壊する番外個体に淡希

「……たく警備何やってンだよ仕方ねえな……、

悪いここはテメェらに任せた、

俺ちよいとあいつ等の様子を見に行くわ」

垣根はそう言々と羽根を広げてホテルから出て行ってしまった

襲撃（前書き）

——最早ギャグじゃねえ……

——ではでは

襲撃

——ホテルの外——

警備中だったシグナム達は襲撃してきた大量のガジェット達により苦戦を強いられていた

「クソ！！なんだよこの数は」

「全くだ、だが、大したことはない！！」

しかしながら、隊長格のシグナムとヴィータの二人が奮闘しているお陰か、その状況も次第に変わりつつあった

「はぁぁぁあー!!」

撃墜数を着々と増やしているシグナムとヴィータ

（くそ!! 私だってやれる!!）

スバルとティアナはそれに続こうと攻撃の体制に入っているが、

その中でもティアナは独りだけ様子がおかしい

丁度その時、羽根を広げてスーツ姿で現場に辿り着いた垣根

（あん？あいつ何やってんだ）

早速、不自然なティアナの動きに気づいて首を傾げる

「いっけえー！！！！！」

しかし、次の瞬間ガジェットに向かい攻撃を放つティアナ

(あーあ、たく……)

その不自然さにいち早く気づいていた垣根は既にティアナの攻撃先に回り込んだ

「あ………、」

「危ねえ!! 避ける!!」

咄嗟にスバルに向かい叫ぶヴィータ、

ティアナから放たれた閃光はスバルに迫る

ドカーン！！　という凄まじい爆発音を立ててそれは直撃した

——筈だったのだが

「世話が焼けんね全く」

直撃した筈の煙の中から、白い羽根を開きスバルを片手に抱き寄せ
ている垣根が姿を現した

「……ちがうんです垣根教官これは作戦で」

「ふーん、別に良いんじゃないね、」

垣根の登場に戸惑うスバルは咄嗟に言い訳を述べる

「それが作戦ってなら、

俺は戦闘の度にテメェらごと敵をまとめて吹き飛ばすだけだから」

ふざけた様に二人に話す垣根だが目が笑っていない

「……とりあえずデメエは出とけ、

それともどうしても役立ちたいなら俺の身代わりにでもしてやろうか？」

微笑み掛ける垣根にティアナは自身の血の気が引いていくのを感じた

「いえ……」

悔しそうに唇を噛み締めて垣根に答えるティアナ

「そうか、なら大人しくそこで戦いが終わるの待ってろ」

垣根はそう言々と羽根を広げてガジェット達へと向かっていく

「垣根、お前いくらなんでも…」

「アイツがいても、身代わりになるぐらいしか役に立たたねえよ」

垣根は吐き捨てる様に表情を曇らせるヴィータに答える

「……………」

「まあ、あいつ等には俺から話しとくから安心しとけ」

垣根はそう言うと黙るヴィータの肩を叩いて羽根を展開する

そして、垣根は一直線に前方にいるガジェット達に向かう

「――絶望しろコラ」

――まるで、虫けらの如く一瞬で鉄塊に変えられてゆく大量のガジェット

「相変わらず凄えな垣根は……」

「全くだ……」

その光景に啞然とするシグナムとヴィータの二人

——数分もしない内に垣根一人にガジェット達は一体も残さず殲滅させられてしまった

――その後、

戦闘が終わりパーティーから帰ってきた六課一同と一方通行達は一段落ついて土御門達と話をしていた

「どうやら話を聞く限り、

ホテルに襲撃されるのは予想済みやったちゅうわけやな」

「そういう事だ、俺達はその情報をいち早く掴み警備に派遣されたんだが……」

はやてに向かい左右に首を振りため息を吐く土御門

「どうやら無駄骨らしかったな、

レリックとやらは向こうに回収されてしまったみたいだ」

「全く……、僕達はこれで退散なわけですよ」

…と隣で話す土御門に続いて不満げに呟くエツアリ、

「なら早く行けよオ

テメエらに構う余裕はアねえんだよオこっちはア」

疲れた表情を浮かべている一方通行は二人に言う

「わかってるにゃー、

あ、後、一方通行、言い忘れてたが――」

重苦しい雰囲気を纏った土御門はゆっくりと口を開く

「……垣根には注意しとけ、これは忠告だ」

土御門はそう言うどエツアリを連れて一方通行達の前から立ち去った

(忠告？ 一体どういう……)

「二方通行、どうしたの？ そんな深刻な顔して」

グループの二人が立ち去ってしばらくした後、

深刻な表情をしている一方通行に様子にフェイトは首を傾げ訊ねる

「……ああ、いや何でもねえ」

歯切れの悪い返事を返す一方通行、その表情はどこか重苦しい

「何があっただんでしょう」

「知らないわよ！！それより垣根は？」

辺りを見渡して垣根の姿が見えない事を絹旗に小声で訊ねる麦野、

「垣根教官ならティアナさんとスバルさんの所だと思います」

すると、絹旗の隣にいたエリオは重苦しい雰囲気で麦野に伝える

「……………なにか？ あったの？」

「……………はい、まあちょっと」

訊ねる麦野に苦笑いを浮かべて答えるキャロ

「……………心配だね」

「……………」

その場にいた全員は静寂した空気の中、ひたすら沈黙していた

――

――丁度その頃、

一人落ち込むように塞ぎ込んでいる一人の人影

「……ひぐ……うう……う」

ミッドチルダの海の近くにある浜辺、

一人落ち込むティアナは次々に溢れてくる涙を自身の袖で拭う

『役に立ちてえなら俺の身代わりにでもなるか？』

ふとそんな垣根の言葉が頭を過る、

ひたすら自分自身の非力さが腹立たしかった

（役に立たない……）

その言葉が深くティアナに突き刺さり、情けなく惨めな気持で一杯になる

「……みつともねえ涙を流すんじゃないよ」

と突然声と共に拭っていた涙をハンカチで拭かれるティアナ

「……ふえ」

いきなりの出来事に頭が回らないティアナは力が抜けたような声を溢す

「垣根…教官？」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーンって
古いか流石に」

落ち込むティアナの隣にいきなり微笑み現れる垣根

しかし、垣根を見たティアナは視点を外して素早く目を逸らす

「……私に何の用ですか」

「まあちよつとな、お前には酷いこと言っちゃったし

……半分詫びにきた」

垣根は落ち込むティアナの方へ身体をやり軽く頭を下げる

「……悪かったな役立たずなんて言っちゃまってよ、

お前にああでも言わねえとあんときは下がらねえと思ったんだよ」

「……同情ですか？」

ティアナは頭を下げる垣根に皮肉ったような一言を放つ

「……同情？」

思わず首を傾げて聞き返す垣根、

しかし、ティアナは怒りを露にして話を続ける

「そうですよ！！私みたいな凡人で非力な人間に同情してるんじゃないんですかと言ってるんです！」

それをティアナから聞いた途端に吹き出して笑い声を上げる垣根

「…プツ、ハハハハ!!」

なんだよそりゃ!! するかよ同情なんて!!」

「笑わないでください!!」

笑いすぎて涙を流した垣根はそれを拭き取りゆつくりと口を開きティアナに話し出す

「……いいか? 俺は力がねえとか役に立たねえ奴は教導なんて鼻ツからしねえ、

大体、力がないから役に立たねえなんて言ってねえだろ」

垣根はそう言っているとティアナの頭をクシャクシャと撫でる

「……………え？」

垣根の思わぬ一言に気の抜けた声を思わず溢すティアナ

「テメエは、テメエらには素質はある断言してもいいぜ、
だけどな、俺が役立たずだったのはそうじゃねえ」

垣根は撫でていた手を止め屈み、ティアナと同じ目線でジッと見詰める

「独りだけ突っ走って

仲間を…大切な奴に向かってその引き金を引いちまって危険に晒したことこれに対して俺はそう思ったんだ」

優しく微笑む垣根は先程の戦闘の際の殺気も威圧感も微塵も感じられない

「…俺の世界じゃ仲間を犠牲にしても目的さえ達成すればそれでいいなんて考えが当たり前だったんだ、

けどテメエらは違うだろ？ティアナ、お前の心配や助ける仲間がいやがるじゃねえか」

そう言って目線を物陰にやる垣根、するとそこには小さく縮こまるスバルの姿があった

「…人ってのはよ、結局一人で生きていけねえんだよ、

俺だってあいつ等やお前らがいねえと生きていけねえし、支えがねえと折れる…」

垣根は海を見つめて何処か悲しげな表情を浮かべ座り込んでいるテ
イアナに言う

「垣根…教官……」

「だからよそんなに抱え込むんじゃないよ」

話す垣根はそう言うとティアナの方へ身体を向けて微笑む

「じゃあ、俺はこの後仕事あつから帰るわー！

バ～イチャ～！！」

そしてその後、身体を翻して管理局へと帰る垣根

「垣根教官、」

「心配すんな、大丈夫だ、しばらくアイツを一人にさせてやれ」

物陰に隠れていたスバルに頭に手を置き微笑む垣根

（だがなんか引つかかる……、なんだ？）

妙な胸騒ぎがしながらもとりあえず垣根はその場を去るのだった

衝突（前書き）

――更新します――

――では――

衝突

――あの出来事から2日

垣根の話を聞かされたティアナはどうやらスバルを連れてむしろに特訓に励んでいた

ティアナの急な態度の変化に戸惑うのはや一方通行達だが、

教官であろう垣根の口からは知らないの一言だけ

この時、正直ティアナの変化は垣根にも全くの予想外だった

（……この間の違和感、

あいつ俺の言ったことの捉え方を間違えちゃいねえか？）

その話を局員の一人から聞かされた垣根は首を傾げて書類に目を通す

そこに垣根の目にはいつくるのは一人の男性の顔写真

（兄貴ねえ……）

思わず頬杖をついてため息を吐く垣根、

すると、部屋の扉が開いて一方通行が珈琲カップを片手に現れる

「よオメルヘン、残業かア？」

「てめー冷やかしかコラ」

無様だと言わんばかりに書類に目を通す垣根にほくそ笑む一方通行

「毎回、俺に仕事押し付けてるツケだア…、
しっかりやれよクソメルヘン」

「うるせえこんなもん未元物質で偽造してやるし!!」

これなら仕事もちよちよいのちよいつてな」

すると垣根は未元物質で羽根を展開し、

そこから偽造した記入されている大量の書類を重ねる

「……んな事がアできんなら! 最初から自分で仕事しろオコラアア
!!」

「偽造が面倒だからヤダに決まってンだろうが、考えろセロリ」

次の瞬間、一方通行は激怒して垣根に襲いかかるが、

相変わらず未元物質の見事な防御率に全て攻撃が無効化し受け流される

「ふはははは、ひれ伏せ白髪モヤシ」

「クロス…、ぜってえクロス!!」

高々に笑い声を上げる垣根に青筋を立てて怒りを露にする一方通行

——とその時だった

「なにをやっているの？ 貴方達？」

垣根が仕事で使っている部屋の扉が開き、

争う二人の目線の先には扉に寄り掛かる結標淡希がいた

「…見てわかんねえかア？

この馬鹿の粛正だア」

「イヤン怖いわ、一方通行、優しくして」

「…その様子だと相変わらずみたいね」

二人の会話を聞いていた淡希は呆れたようにため息を溢す

「あり？お前、昨日の晩に土御門達と帰ったんじゃないのか？」

「そのつもりだったんだけどねえー…」

淡希はチラリと一方通行を見てゆっくりと口を開く

「…こちらに私は一方通行の監視役でこちらに残る事になったのよ」

淡希の言葉を聞いていた一方通行は目を丸くする

「はア!?!きいてねえぞオ!?!ンな事!!!」

「当然よ、言っていないもの」

淡希の言葉にポカーンと啞然として口を開く一方通行

「ドントマインド、略してドンマイ」

呑気に一方通行の肩を叩いて楽しそうに微笑んでいる垣根

逆に彼はこの一方通行の反応をかなり楽しんでいるようだった

すると、淡希は何かを思い出し一方通行の肩に手を置く垣根に話を出す

「あ！そうだった垣根、

今から貴方の教え子が模擬戦やるみたいよ」

「…は？模擬戦？」

垣根は首を傾げて淡希に聞き返す、

「確か今日は……」

ティアナ達の訓練の日程を思い出して呟く垣根

確か今日は模擬戦なんて予定していなかった筈だ

「…あいつ…」

恐らくは無理矢理誰かに頼み込んで模擬戦申し込んだに違いない

この時、既に垣根の嫌な予感ほほ的中していた

（……チツ、馬鹿な生徒を持つと大変だなこりゃ）

思わず頭を抑えて深いため息を吐く垣根、

その顔はどこか深刻な表情を浮かべていた

「……悪イ、ちよいと行ってくる」

垣根はとりあえず模擬戦をしているティアナ達の所へ向かう事にした

所変わって訓練場、

模擬戦をなのはに申し込んだティアナとスバルは互いに連携を取り
合い様々な攻撃を展開させていた

「行くよティア!!」

「わかってるわよ」

二人は一見なかなか良い動きをしているように見えなくてもないが、

明らかに普段の戦い方ではなくどの動きも不自然な違和感がある

「…麦野、二人ともなんか様子が超おかしくありませんか？」

「……うーん、それ私も考えてた所」

外で模擬戦を見学している絹旗の言葉に肯定するように頷く麦野

「違和感ねえ…、

見ててミサカは全然わかんないんだけど」

とため息を吐き、模擬戦を退屈そうに見詰める番外個体

「確におかしいね、普段はあんな連携攻撃したりしないのに」

「…せやな、確かに妙やあの二人、」

複雑な表情を浮かべて呟くフェイトの言葉に頷くはやて

しかし、流石はなのという所か、

二人の攻撃は上手くかわされて、当たらない

「くう!!」

攻撃が当たらない事に思わず声を上げるティアナ

その瞬間、体制が乱れて大きな隙が出来る

(……………!!)

すかさず、隙を見せたティアナに攻撃を仕掛けるなのは

――…だが

「……幻影！」

……そう攻撃したのはティアナの幻影だった

その瞬間、なのはに接近するティアナとスバル

どうやらこのなのはの隙をついて一気にカタをつけるらしい

「はあああ!!」

次の瞬間、爆発音と共に大量の土煙が舞い上がりなのは達を包み込む

614

「……不味いな」

「……ああ」

思わずその光景を見て眩くシグナムと頷くヴィータ

そして、しばらくして、

土煙の中から二人の攻撃をかわしているのはがゆっくりと姿を現す

しかし、どうやらあの攻撃を完全には避けられず、若干、手負いのようだった

「どうしちゃったのかな二人とも……」

模擬戦は喧嘩じゃないんだよ」

若干、殺気の込もった冷徹な声で話すのはに後退するティアナ

「わ、私はもっと強く成りたいんです！

もう誰も傷つけないし失いたくない！
皆を守る力が欲しいんです！！」

ティアナは真っ直ぐな眼差しを迫るなのはに向けて叫ぶ

しかしながら、相変わらず表情を変えないのははそんなティアナ
にゆっくりと口を開く

「…少し頭を冷やそうか」

次の瞬間、ティアナはなのはから放たれた閃光が直撃し後方の壁に叩きつけられる

「ぐああああ!!」

「…………ティアナ!!」

壁に打ちつけられて悲鳴を上げるティアナの光景に思わず名前を叫ぶスバル、

だが、なのはは攻撃を止める気配は全く無い

「デイベインバスタアアア！！」

爆発音と凄まじい爆風が辺り一面に広がり煙が上がる

「ティアアアアア！！」

悲痛に訓練場に響き渡るスバルの叫び声

しばらくして、爆発による煙は段々と消えゆき、

一つの人影がその煙幕の中から姿を現す

「……テメエには失望したぜ」

――そう、傷だらけのティアナを抱えて悲しい表情を浮かべ白い羽根を大きく広げた垣根帝督だった

真実（前書き）

――久々に更新します

――では――

真実

白い羽根を広げた垣根帝督は抱き上げている傷だらけのティアナを
そっと地面に降ろす

「……、テメエはなんで自分自身の教え子を傷つけるんだ、なのは」

悲しげな瞳で振り返る垣根はレイジングハートを構えているなのは
に問う

「……邪魔、しないでくれるかな垣根」

「……あ？」

なのはからの一言にピクッと青筋を立てる垣根

「デメエは何か勘違いしてねえか？

ありや教導とは言わないんだぜ」

なのはは無言のままレイジングハートを垣根に向かい構える

「……自分自身の考え方を他人に押し付けてそれが駄目なら平気で傷つける、

餓鬼だな……」

「うるさいー!!」

次の瞬間、なのはから放たれた閃光が垣根に向かい放たれ

そして、ドカンという凄まじい爆発音を立てて直撃する

「……無駄だっただろうが」

しかしながら、垣根は何事も無く煙を振り払い無傷のまま姿を現す

「あー…、久々にムカついたぜ

ホントに馬鹿げてるな、とんだ茶番劇だ」

凄まじい威圧感を醸し出す垣根は羽根を広げたまま、なのはに一步步近づいてゆく

「いや!! 来ないで!!」

閃光が次々に襲いかかるが全て未元物質の羽で防ぐ垣根帝督

そして、近距離まで近づいた垣根はなのはに向かいゆっくりと口を開く

「……くたばりな」

——次の瞬間、

ドカァンという凄まじい爆発音と共に、
なのはの身体は垣根の羽に吹き飛ばされて壁へと叩きつけられる

「……ぐう」

力なく壁に打ち付けられて座り込むのは

そして垣根は今まで以上に冷徹な表情を浮かべていた

「俺に楯突いたからには五体満足でいられると思うなよ？」

——もう一度飛べ」

再び振り降ろされた垣根の羽根はなのはに直撃して再び遠方へと体が吹き飛ぶ

「お、おい…幾らなんでもやり過ぎじゃねえか？」

「そうね、ちょっとヤバイかも」

その凄まじい光景を外で見ていて思わず呟くフェイトとヴィータ

——しばらくして、

吹き飛ばされたなのはは瓦礫の中から魔法で辺りを吹き飛ばして姿を現す

「——…どうして？」

しかしながら、

どうやら、なのはの身体は傷だらけで震える足に力を込めて立ち上がっている状態が精一杯のようだ

すると、六枚に開いた羽根を仕舞う垣根は悲しげな表情を浮かべて
ゆっくりと口を開く

「…お前にはわかんねえよ、

大事な物を失った奴がどんな気持ちかなんてな」

垣根は傷だらけになって気絶しているティアナに目をやり話を続ける

「……力を求めてあんな風になっちまってんのは間違ってるとは俺
も思う」

だけども、それ以上にアイツの話を何も聞かねえでテメエの事情を
押し付けてるお前には一番腹が立つ……」

怒鳴る垣根は拳を握り締め、傷だらけのなのはに背を向ける

「――テメエには本当にかっかりだぜ」

――垣根は一言、

傷だらけのなのはにそう告げると垣根は羽根を仕舞う

そして、なのはは膝から崩れて力無く地面に伏せた

――…医務室

シャマルは傷だらけで寝込んでいる二人を診察し、心配そうな表情を浮かべているフェイト達にゆっくりと口を開き話し出す

「……大丈夫よ、ちょっとすれば意識も戻ると思うわ」

シャマルの言葉に思わず安堵するフェイト達

「…それにしても垣根は何処に行っただんでしょうか」

「…知らないわよ」

絹旗の問いにため息を吐き疲れたように答える麦野

「とりあえず今は二人共寝てるみたいだから、

しばらく寝かせて置きましょう」

そして、その場にいた全員はシャルと共に医務室から出て行く

それから数分後、

シャル達が立ち去った後、なのはは目蓋を開いてゆっくりと身体を起こし上げる

「……………」

辺りを見渡せば医療機材や薬などが棚に並べてあり、

自分は病人用のベッドの上

「……そっか確か垣根に」

「……よオ、気がついたかア」

なのはが声のした方へ視線を向けると、

そこには医務室の扉にもたれ掛かる一方通行がいた

「……何の…用かな？」

なのはにはいつも通りの元気が無く、一方通行から視線を逸らしていた

すると一方通行は腕を組んだままそんなのはにゆっくりと口を開く

「…アイツの話、聞きてえか？」

ピクッ　と一方通行の一言に身体を反応させるのは

「……垣根…教官の話…？」

すると、先程までなのは隣の隣で寝ていた身体を起こすティアナ

「…何だお前エ起きてたのかよオ………」

「何…ですか？垣根教官の話って…」

一方通行は真剣な表情を浮かべている二人にゆっくりと口を開き話し出す

「…流石に今回はアイツ自身、

かなりショックだっただろうなア…」

一方通行はそう言うため息を吐き後頭部を掻き真剣な眼差しで二人を見据える

「——恐らくテメェらはこれを聞いたら、

もう垣根とは今までみたいな関係に成れねえかも知れねえ

それでも聞かか？」

そんな真剣な表情を浮かべる一方通行

しかしながら、なのはは覚悟を決めて黙ってゆっくりと頷く

「分かった……………」

一方通行はそう言うのと垣根について二人に対しゆっくりと語り始める

「……………アイツは……………」

空気の重い中、二人に知られざる垣根の事について語る一方通行

「――自分自身の手で大切な恋人を虐殺したんだよ」

一方通行から一言語られた瞬間、

その場の空気は一瞬にして凍りつき二人は固まった

垣根帝督（前書き）

——ホイホイ久々に更新したいと思います

垣根帝督

「……アイツは自分自身の手で大切な恋人を虐殺したんだよオ」

複雑な表情で話す一方通行からの一言を聞いて固まる二人

「……え？」

なのはは頭が真っ白になった

あの笑い声を上げて今までふざけていた垣根、

その表情は本当に楽しそうで自分達もそんな風にふざけている垣根から振り回されるのをどこか楽しんでいた

「そん…な……」

言葉が見つからないのはとティアナの二人、

そんな二人を見て一方通行はため息を吐き話を続ける

「…………アイツはお前らが互いに傷つけ合う姿を見てなんて思った
だろうなァ…………」

一方通行の言葉にビクリと肩を震わせるのはとティアナの二人、

「…………自分自身の仲間を平気で傷つけるテメェら、

もしかするとそんなお前らと自分自身がやっちゃった事がアイツの
中で重なったかも知れねえなァ」

先程までいた垣根を思い浮かべる二人は黙って俯く

しばらくして、ゆっくりと一方通行へと口を開くティアナ

「なんで恋人を殺したんですか？」

複雑な表情を浮かべて一方通行に訊ねるティアナ

すると一方通行は一息入れて再び二人に話し出す

「……暗部組織ってのはそうゆうもんだア……」

アイツは上からの指示で学園都市の暗部組織を抜けた者を全て粛正する役目を担った事があった」

一方通行は真剣な眼差しを向けて話を聞く二人を見詰める

「――……それがア暗部粛正計画、

だが、この計画には裏があったらしくなそれを知ってしまったのがアイツの大切な恋人、

心理定規だったんだよオ」

一方通行は悲しげな表情を浮かべて更に話を続ける

「勿論、上の連中はア情報保護の為に心理定規を殺害しなければ成らなかったんだがア

でも、垣根は最後まで反対したんだア……

しかし、アレイスター、

学園都市で一番偉い奴との直接交渉権を持たないアイツの意見は却下されたア……」

二人は一方通行の話を聞いて愕然とした

「……それじゃ垣根教官は――」

「そうだ、だから自身の手で殺したんだ他の奴から殺される前に自分自身でケリを着けたかったんだろ

証拠も残らないように跡形もなく消し飛ばしたそうだ」

話を聞いていたのはティアナの二人は黙って俯き涙を流す

「……さっきメエらの軽率な争いがアどんだけアイツを踏みにじったかアこれで理解できたかア？」

そんな二人を見て悲しげな表情で訊ねる一方通行

「……なんで垣根は、この事をずっと黙って……」

「忌まわしい過去を背負って苦しみながら前に進むのがアイツの生き方だア

そりゃアイツはア今でも後悔してるだろうがア実際テメェらや俺達と楽しく笑っていやがるじゃねえかア」

楽しく笑っていた垣根を思い出すティアナとなのはの二人

先程まで自分自身がどれだけ身勝手な事をしたのかを思い出す

「……私、ずっと前に事故を起こした事があってとても苦しんだ事があった

その事でティアナ、
貴女に同じ思いをさせたくないばかりに自分自身の勝手な考えを押し付けてたの……」

俯いて口を開くなのはの言葉に耳を傾けるティアナ

「……そう……なんですか……」

申し訳なさそうに俯いてなのはに話すティアナ

なのはは更にティアナに話を続ける

「……でもねそれ以上に私達より苦しい思いをしてた筈の垣根は、一切そんな素振りも見せないであんな風に毎回楽しそうに笑ってた」

「……強い…ですよね」

なのはの話聞いて頷くティアナは悲しげな表情を浮かべて口を開き答える

「それで……垣根は？」

一方通行に迫るように訊ねるのはだが、

迫られた一方通行は左右に首を振りゆっくりと口を開く

「さあなア……、俺にもわかんねエ、もしかするともうここにはア戻って来ねエかもしれないねえなア」

一方通行の言葉に訊ねるのはは啞然として固まる

「え？そんな嘘だね」

衝撃的な一言に動揺しながらもなのは一方通行に詰め寄るが一方通行は目線を逸らさして口を開き話す

「嘘を言ってるように見えるかよ俺が……」

なのは突き放す一方通行からの一言、
なのはは傷だらけの自身の身体を抑えて立ち上がり無言で医務室から走って出て行く

「なのはさん！！」

声を上げるティアナだが既に遅く、医務室から出ていったなのはには聞こえない

「どういう事ですか一方通行さん！」

一方通行に詰め寄る思わず怒鳴り声を上げるティアナ

だが、一方通行はそんなティアナに冷静に答える

「話の通りだア…、テメエらを傷付けた自分の事が許せねえんだよ
あいつはア

だから、帰ってはア来れねえ」

複雑な表情で話す一方通行の言葉に黙り込めるティアナ

一方通行はそんなティアナにゆっくりと口を開き話し出す

「お前等の事は嫌いじゃねえけどな…、逆にアイツも俺もテメエ
らみたいなぬるい奴が羨ましいぜエホントになア」

ティアナにそう言って医務室から立ち去ってゆく一方通行

そして、俯いている一人の少女だけの医務室には静かな沈黙だけが
流れていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1256p/>

最強とていとくんと魔法使い

2011年8月14日18時47分発行